ういふことに氣をかねるほど、館内の空氣になれてゐないことを豐に裏書きして見せた。

「大概十時前までいすの。」

その時、友だちの女給が來てお春に仕事の方のことを囁くと「今參りますわ。」と言ふと、友だちの女給は豐にも人なつこく挨拶をして行つた。豐は

「用事があるんでせう。ぢや歸りにでも一緒に話をしませう。」

と、氣をきかしてドアの方へ行くやうにすると、

「お歸りにお伴をしますわ。」

と言つて廊下を曲つて行つた。

豐は席にもどると、映畫をそつちのけにして色々なことを考へた。何んだか海岸の靜かな午後、ゆつくりと歩いた渚のほとりや、その町の美しかつた月夜のこと……あんなに小さな子供だつたのが美事に肉づいて、咲き切つた花のやうにな

つてゐるのを、殊に微妙な少女の成長を考へた。……小さなお春がやはり小さい友達と一緒になつて、海岸へ出て、堤防のやうなものを作つたり、その堤のかげに附木細工の家をこしらへたりしながら、寄せて來る波に攫はれまいとして、少しづゝ堤防を高めたりして遊んで居たことを思ひ出した。齒をむきながら這ひ寄る生物のやうな波が來るごとに、高い聲で叫びながらゐた。「そのお春がこの都會のしかも底の底に出て來たのだ。何にも知らずにうつかりと遊んで居るやうな氣樂さで、毎日この埃の中にゐるのだ。」豐はさう考へながら、ふと、さつきのドアの方を眺めるとお春はドアにもたれながら豐の方を凝視して居た。それは滅多に知人に會つたことのない者が、急に會つた時の心安さでしげしげと見て居るといふ顔つきであつた。

どこか間が抜けたやうな憯然したやうな無邪氣さで、時折映畫を眺めたり豐の方へ微笑をしながら、又、客を案内したりして居た。

活動がはねる前にお春はすぐ背後に來たので、揉み合ふやうな看客を遣り過し乍ら椅子に片手をかけて佇んでゐると

「わたし、今直ぐに歸りますわ。非番にして貰ひましたから。」

低い聲で囁くやうに言ふのが、非常に親しさを增したやうな氣がした。少し顏を前の方へ持出したやうな恰好が娘らしく見えた。

「前に待つてゐちやいけないだらうか。」

彼は直ぐに待合せる場所を考へ出せないで言ふと

「さうね。何處がいゝでせうね。」

とおはるも言ひ詰つたが

「何處かそこいらでいゝわ。十分ほど經つたら歸りますから。」

と未だ階段の方に込み合つた看客が、此方を見てゐるのを氣にしながら言つた。

「ちやはるさんはどんどん歸りなさい。僕はあとから尾けて行くから。」

「え。さうしませう。」

彼女は階下へ下りて行つたあとで、豊はドアの陰から看客が一人も居なくなつた、どこか骨立つた椅子越しに寂しい正面の映畫の布面を眺めながら、人人のあとから一段づつ階段を下りかけた、さきの人が中中捗取らないので彼は矢鱈に下足の番號を口さきで呼びながら、下足番の取りよいやうに鼻さきや手先の隙をねらつて振舞はしたけれど、下足番は彼の札の前を骨だらけの手で掠めながら取殘して行つた。ふと氣がつくと、すぐ出口の正面の××館の横手の石造りの側面に娘らしいふだん着に換へたお春が、こちらを見つめながら小さい風呂敷包みを手にもつて立つてゐる姿が目にはいつたので、彼はあはてゝ下駄をつゝかけて、表へ出た。

表へ出るとお春は人込みの中を分けて、公園とは反對の入谷の方へ出る廣い通

りへ出て行つた。豊はすぐ追ひついた。

「おいそぎの用事がおありなさるんぢやなくつて——。」

と言つて微笑して見せた。豊は用事がないと言ひながら、この車阪へ出る通りが餘りに明るいのを氣まり悪く思つた。活動のハネた時刻なので殆ど道一杯に群衆があるいてゐた。おはるはあまり目立たなかつたけれど、自然、道の隅の方を歩いてゐた。話をしようとしながらも餘り人通りがはげしいので、豊は一間ばかり前をあるいたり、また、お春のあとから歩いたりした。

もう上野の森が見えるやうな處へくると、彼等は入谷に近い暗い道を選んで、肩を並べて歩いた。

「もう直ぐですの。わたし、何だかあんまり人通りが多くて一生懸命に俯向いて歩きましたわ。でも、交番の所に占師が居るでせう——。」

と言つて又言葉をついで

「あの人が、毎日わたしの通るのを知つてゐて、今日貴方と一緒だつたものですから、ぢつとこつちを見て居ましたの。……何んだか占師つて氣味の悪いものですね。」

豊はその占師を永い間知つてゐた。眼が窪んで蒼白く瘠せこけて、どんな寒い晩でも凍え上つたやうにつッ立つてゐた。小さいテエブルにひつかけた汚れた白木綿がひらひらした陰から、二本の足首が何時もきちんと揃つて、ほの白く、骸骨の標本のやうに地べたに食つ附いてゐた。三年も四年もあすこに毎晩店を張つてゐるのだ。いつも、ぢつと街路の上を見つめたり往來の人々を頭ごなしに眺めたりしてゐた。

「あいつは三四年も前から彼處に毎晩のやうに立つて居るんだ。いつもはるさんを見てゐるんですか。」

「え。お母さんと一緒に歸るでせう。そして毎晩あの前を通るんですもの。わた

しが館に勤めてゐることをちやんと知つて居るらしいんですの。お母さんが一度占つて見やうかと言つていらしつたんだけれど、わたし怖くて止めて貰ひましたの。」

とお春は今にも目に見えるやうに恐さうに肩さきを震はした。豐は豐で公園界隈を遊んで歩いて谷中への近道を此通りへ出ると、いつも占師の前を通らなければならなかつた。その度毎に、冷たい一瞥が彼から豐に注がれた。ドウせ下らない奴だと思ひながらも毎時自分の運命に係はりのあるものゝやうに、心で打ち消しながらも氣になつて社方がなかつた。

「氣にしない方がいゝんです。占つて見て貰つたつて仕樣がないんだからね。お母さんは昔風な人だからね。」

豐はどつちつかずのことを言ひながら氣味惡い彼の顏を目の前に差しつけられたやうな氣がした。

お春は少し眉をよせながら、さも氣味の惡いものにふれるやうに

「ですからわたし何時もあの方の顏を見ないやうにちつと俯向いて通りますの。」

とお春は薄暗いやうな聲音で言つた。

道は入谷に近い寺の多い暗い通りへ出た。そして奥まつた路次の一軒の前へ來ると

「此處なんですの。お入りなさいまし。」

（と彼に言つて仄暗い格子を開けて）お母さん——。」

と呼ぶと、聞き馴れた聲で

「おはるかい。」

と返事する聲がして、出て來て外の暗いところに立止まつてゐる豐を怪訝さうに見て「何方をお連れ申したの。」と言つた。

「珍しい方！　それはそれはお母さんの吃驚なさる位珍らしい方なの」と言つて

お上りなさいまし。」と言つたので、豐は上つた。

四疊の長火鉢には火が起つてゐて、鐵びんが溫かい湯氣をあげてゐた。——豐の顏を見ると母親はおどろいて「まあ——。」と言つて、ものの二秒ばかりも見つめてゐたが

「本當にお久し振でございましたね。その後はお變りもなく……。」

と五十に近い母親は挨拶をした。さうして

「本當に人間は何處にでも會へる時は逢へるものでございますね。しかし春子がよく覺えてゐたものですね。」

と言つて娘の方を見ると、お春は

「え。覺えて居ましたの。」

と豐の顏をちよいと見て微笑した。豐は

「一昨年こちらへお出になつたさうですておはるさんからおききしました——。」

「勸めて呉れた方がありましてね。こちらへ參りましたけれど……ほんとに貴方の前ですけれど東京つて所は酷い所でございますね。二三度、小間物店まで出しましたけれど、みんな親類の食ひものにされてしまひました——。」

と、母親は年寄りらしく饒舌り立てるのをおはるは可笑しさうに聞いてゐたが

「初めていらしつた方にそんなことを言はないものですよ。」と注意しても

「他の方でないからようございますね。(と豐の顏を見て)もうその後からは、何も彼もすることが恐ろしくなりましてね。それにお春が少しづつ働いてくれるものですから、幾らかの足しになるのがせいぜいなんですよ。」

と言つて「はる子、お前お蕎麥でも言つていらつしやい。」と言ふと、お春は外へ出て行つた。

「少し知り合ひがありまして、あんな處へ出したんですが、それに惡いものでも附くといけないと思つて毎晩迎へに行つてやりますの。」

豐はすぐに力を籠めるやうに

「その方がいゝんです。うつかりすると、あゝいふ場所ですからね。」

と言ふと母親は聲をひそめるやうにして

「歸りなどに、試して見てゐますとね。彼處此處に三四人づゝ若い男が夜遲くまで女給さんたちの歸りを待つて、どうかしようとするらしいのが居るんですよ。中には私たち親子が歩いて居ても、しつこく後を尾けて來る人があるんですよ。それがね。(時々國言葉で言つて)宅の近所まで跟いて來たと思ふと、もう見えないんです。すると翌朝見ますと、表札でも調べて行つたらしくマッチの棒が五本も六本も落ちて居るんでございますよ。ほんとうに油斷も何も出來ません。東京つて所は本統に人氣の惡こすいところですね。」

と言はれると、彼も何んだかその不良少年の一人のやうに思はれて、むづがゆい氣がした。

「淺草は墮落した不良少年の巢窟があるといふんだから、春さんのやうな人はよくお母さんが氣をつけて上げた方がいゝんですね。」

「ほんとに夜も眠られないほど心配になるんでございますよ。あれがあの通りの子供ですからね。」

と話してゐると、お春が歸つて來たので話の尾が切れてしまつた。すると年寄りは上手く尾をついで

「海岸にいらしつた頃は、あなたもまだお若うございましたね。帽子をこんなに冠つて——。」

と言つてあみだのやうに冠つた彼の恰好を手でして見せると、お春も笑つた。

お春の笑顔があまりによく肉づいてゐるために、頰などが窮屈さうにむくれあがるのを見た。それは一と掴みほどある豐麗な、見るからにやはらかい處女らしい高まりがうねつてゐたからである。

お蕎麥をみんなで食べるとお春が

「いつだつたか海岸にゐた時分にも、一緒に何かいただいたことがありましたのね。お祭の時でしたわ。」

と言ふと、母親は

「あ、さう、さう、あの時、お前は耻かしがつて一緒に頂かなかつたぢやないか。」

と云ふと、お春は幾らか甘えるやうな睨むやうな目付をして

「そんなことはないわ、御一緒にいただきましたわ。」

とこれもいくらか、田舍訛りを交せながら云つた。

いろいろな話をしてゐる内、もうかなり遲くなつたので暇を告げると、もう十二時近かつた。

「わたし、其處までお送りしますわ。」とお春が言つて寺の角まで來た。

「お母さんは相變らずでせう。又いらしつて下さいましね。」

と、はじめお春一人が見送りに出てくれたのさへお母さんに氣が置けたし、またお母さんが何か考へなければいゝがと思ひながら

「ぢや、おやすみ。」

と珍しい幼な友だちに別れて谷中の方へ、踏切りの陸橋を上つて行つた。陸橋の上から振り返へると十二階の塔の邊りの眩ゆい電燈も大方消されたゐたが、それでも明るい巷の餘映を殘してゐた。お春をあゝいふ混鬧のなかに置くのは恐ろしい。それに彼女はまだ處女だ。しかし間もなくこの大都市の底の底の汚れた空氣が滲みわたつてゆくのだ。あの館を止めない内は到底その恐ろしい誘惑から遁れることができないのだ。と考へながら、最う彼が幼な馴染みであるといふことを餌にしながら、だんだんお春に近づいて行くことが目に見えるやうであつた。ことに幼い時分の彼女を知つてゐる彼としては、急に何も彼もぶちまけたやうな物

懐かしさが勝つて來て、誘惑の多い不良少年の群に踏みしだかれることを考へると、直ぐに明日にでも春子と彼との間をあの時分のやうに固めたいやうな氣がした。それが彼のやくざな生活からだんだん明るみへ向ふやうな氣もするのであつた。

日を經るに從つて豐は毎日のやうに東京館の二階に通つた。彼はそこのドアに近い椅子にいつも小さくうす暗く蝙蝠のやうに外套に包まれて坐つてゐた。お春も彼のさうした不自然な訪問をいつも待つてゐたらしく、彼が彼のラセン階段を上ると、いきなり普通の看客のやうに案内してくれた。なぜだか彼女が卑しい女給風情であるといふ觀念から離れて、あの海岸にゐた幼な友達であるといふ氣持ちが先だつのである。彼はいつも椅子の上から、ときをり、看客を案内しながらのもどり道なので、彼女がそつと彼の左の手を素早く殆ど摺れちがつた瞬間に、暖く掬摸のやうに敏い深い觸れやうをして去つたことなどは、假令彼の横に看客

がゐて注視してゐても、それとは看貫くことが出來なかつたのであらう。それほど數多い微妙な經驗によつて彼等の言葉を絶した囁きが、微かではあるが濃かな密度をもつて爲されたのである。たとへば彼女がもう彼の席から一間ばかりさきを歩いてくるころには、彼の椅子のクッションから稍高いところに、ちやうど熊手のやうな恰好をした一枚の掌が、みな指の腹を戰かせながら、やがて訪れて來る同樣な、併し柔かく白い纖弱なタッチの豫期に、恰も渴き切つてゐるやうに、ぴつたりと小さい白い手を嚥みこんでしまふやうに握り締めるのであつた。ただ、外からは勢ひ彼女の撫で肩が稍左に傾いたといふことなどが、目立つて見えるくらゐであつたが、特に彼女が足を停めるといふこともなく、また特に何か囁くといふこともなかつた。ただ、安つぽい夜の賣子の着るやうな黑い彼女の木綿物の衣ずれと、若い女の通り過ぎたあとの惱ましい體溫の匂ひとでもいふやうなものと、あるかないかと思はれる程度の香料とが、そこの看客と看客とのより密

な薄くらがりを這ひながら、ほこりや人氣の濃かな重みをもつた空氣の中にこんもりと罩められるのであつた。豐は豐でさう云ふ時は、わざと眉毛一本動かさずにぢつと其接觸された感覺の幻影に歸りながら、彼女の指一本づつの感じをありありと味ふやうに、掌へ向けて同時に五本の指をしつかりと抱ぎ合せ、その上を壓しつけるのであつた。

ある日廊下で人氣のないときに

「わたしね。あなたと知り合ひだといふことを女給さんの皆に知られてゐるやうで、これからわざとわたしが案内しないこともあるかも知れませんから惡く思はないで頂戴。でも、そんな氣がして仕樣がないんですもの。」

とお春が言つたことがあつた。館の規定では不品行者は(例へば歸途に男と嬶曳きしたり手紙を交換したり、または看客から如何はしい事をされた時は一一事務所に通知しなければならなかつた)解雇することになつてゐて、事實、館當てに女給

に來た手紙は毎日束にして事務所で開封されるといふ事であつた。それほど嚴格であるに拘らず、かうした鋭い嬶曳が、しかも何千と云ふ看客の前で、しかも最も秘密に行はれるといふことが、豐にとつて一つの皮肉でもあり、まだ二箇月にもならない初任の女給として、これらの事を大膽に(しかも其實は寧ろ無邪氣に近く)するといふことが殆と信じられないことであつたが、時には、さうした握手の際に豐からよく手紙(それは非常に細かいペン文字でかいて、一寸四方位に折り疊んだものであつたが)を渡すことも出來たし、すぐ三十分以内には返事をもらふことも出來た。それは、東京館用箋とかいた半截の赤罫に、鉛筆で走り書いたやうなものが多かつた。今夜は母が迎へに來ませんから一緒に歸りませうと云ふ程度のものが多かつた。

その晩もお春は擦れ違ひに彼に四角な折り手紙を渡したので、席を立つて廊下へ出て、人氣のないのを見澄して讀むと、今夜も一人で歸るから公園に待つてゐ

て呉れとのことであつた。彼は鉛筆で差支ないと返事をかいて待つてゐると、春子は、素知らぬ振りで他の看客を案内しながら擦れちがひにその返事を持つて行つた。

彼等は公園の花屋敷の前の植込の道で、いつも會ふことになつてゐた。そこは、わづかの相違で滅多に人通りのない寂しい暗い道で、同じ淺草にでも此麼靜かな人氣のない處があらうかと思はれるほど暗かつた。丈の高い躑躅や青木、または植込みで、それらの樹蔭を通して活動館の明るい通りや、そこを盛りこばれるやうにして歩いてゐる群衆などが、此處から其騷騷しい下駄の音や話し聲とともに、手に取るやうに透いて見えるのであつた。豐がこの道を行つたり來たりしてゐる間に、やはり、或る目的をもつて彼と同じい寛やかな退屈な歩調で、往來の方へ出たり、または暗い木蔭に佇んだりしてゐる男などがゐた。そうかと思ふと、柵の内庭の植込のかげに明かに若い男女が、黑く蹲まつて或る時はひそひそ

話してゐたりするのが居たりした。

その日は往來からお春がこの道へ入ると、すぐに呼吸をはづませて

「ほら、今此方を向いたでせう。あの人が先刻からわたしの後を尾けて來たらしいんですよ。館を出てから間もなく彼の人が尾いてきたから變だと思つて、藤棚の橋を渡るとき振顧ると矢つ張り此方へやつて來たの。」

お春は豐の方に身體を寄せながら、心配さうに言つた。寫眞館の前から、ぢつと此方を注視してゐるらしい男は、黑いソフトを冠つて長いマントを着流して、草履ばきであることがわかつた。さう言へば、しきりに此方を見つめてゐるので

「どうも尾けてゐるらしいね。まいて終まはなければいけない。ともかく、そこらの暗いところへ這入つて見よう。」

二人は瓦斯燈の光の屆かない、とある植込みに隱れると、彼は急に寫眞館の前をはなれて、すこし慌てたやうに豐の方を目がけて歩き出したが、その時反對の

側から矢張り同じいマントを着た影が、その男のそばへ寄つて行くと、男は、振り返つて何か囁き合つてゐるのが見えた。豊は二人だなと思ふと

「二人ゐるんだよ。愚圖々々してゐると面倒だから早く行かう。」

と急ぎこんで、やや慌てると、お春は眉をよせて

「わたし、見つかつたらどうしませう。」

と、まだ淺い經驗が心を亂したらしい顫え聲で言つた。豊は今弱いことを言つては、益々お春を恐怖させるだけだと思つて

「心配しなくともいいんです。あいつ等は物好きで尾けてゐるんだから、何處かで紛らかてしまへばいいんだ。」

と、私たちは觀音堂から仲店の通りへ出て行つた。「此處は人通りが烈しいんだから、早く歩きさへすれば、大概大丈夫紛らかせるんだ。」と言ふと

「あなたはどんどん先へいらしつて下さい。わたしはあとから行きますから。」

とお春はしどろもどろに言つて、うつむいて、群衆の隅の方の隙間を縫つて歩き出した。

ときどき振りかへつて見ると、二三間あとから顔を眞赤にしながら息を切らしてゐるらしいお春が走るやうにして來るのを見ながらもしやマントの男があとから尾いて來ないかと注意して見ても、それらしい影さへなかつたのに安心しながら、とうとう仲店を通りぬけた。

仲店とは反對なやや暗い向ッ側をあるきながら、電車の交叉點を注意して見ると誰も尾行して來ないらしかつた。反對の壽司屋の屋臺の出てゐる人道にも先刻の男らしいものが見えなかつたので、ほつとした。お春はせいせいやりながら

「わたし、どうしやうかと思つたの。ああ苦しい」

と頬笑しながら胸を叩いた。

「あんな奴が實に多いんだからね。しかし女給のなかにやはり怪うにかされてゐ

る人があるだらうね。」

と彼は女給なんていふものは、一般の人から非常に墮落してゐるもののやうに想像されてゐることなどを話して

「おはるさんもね。いい加減に止めないと、終ひにはどうにもならない目にあふかも知れないんだよ。國とは違つてね。でもお母さんと一緒に歸つたつて尾けられるといふぢやないか。」

「え。そりやわたしも隨分考へてゐるんだけれど、お母さんがお前さへしつかりしてゐさへすればいいんだと言つていらつしやるの。わたし、どんなことがあつたつて詰らないことをしませんわ。」

「それが難かしんだ。」と言つて、彼は口まで出かかつてゐるものを呑み下した。かうして彼とさへ毎晩のやうに會つてゐるのだ。これが彼だけに限られた世界でない限り、その少女らしい可能性があるかぎり、辯士や事務員やが彼女を毎晩迎

へに來る母親に渡してゐても、毎晩のやうに出入する執拗な不良少年の目に止つたら、とても唯は濟まさないのだ。彼らは二里も遠方の砂糖屋の地下を掘つてゆく蟻よりも執拗いのだ。

「だからね。本當に危ないことがあつたら直ぐ止めるんだね。ほんの僅ばかりでも氣を許してゐると駄目なんだ。ほんの僅ばかりだ。」

と彼は何んだか今夜に限つて、彼女がああいふ勤めをする不安と危險とを同時に感じて仕方がなかつた。もつと他にお春の仕事があるやうな氣がするのだ。しかも孰つちかと言へば、お春はぼんやりとした人のよいところがあつた。隙だらけな、田舍育ちの惡氣のないぼんやりした微笑は、何故だか、男の心に鋭い或る誘惑的な可能を首肯かせる點があつた。それは彼女にとつて極めて自然な微笑であつても、邪氣のあるものの受け方には容易な甘さがあつた。豊はそれを考へるごとに苦しく感じた。

「春さんはすこしも東京を知らない。それに淺草も知らない。何も知らない。だから知らないうちに止めるんだね。そりや、しつかりしてゐると言つても止めないうちは駄目なんだ。」

と彼は言つたが、さう言ふ彼がもう自分で憎惡してゐる不良少年の一人のやうな氣がした。この東京の底から底を潜りぬけながら、絶間なく泥水のやうな汚濁された呼吸をしてゐる彼もその一人のやうな氣がした。しかも自分でそれ等を罵りながらも、もうその手でお春をささへやうとしゐるのだ。自分の底の底を濯ぎ盡すことは苦しかつた。しかも豊はこの幼な友達を見す見す衝き墜すやうなところを見てゐられなかつた。木賃やベンチの上や貧民窟に起臥する素性の知れない垢まみれな不良少年の手に彼女を墜したくなかつた。それより自分が何人よりも彼女を受取るべきだといふ氣かした。それは決して恥ぢることのないことだと思つた。彼女は何も知らない。本當に知らないのだ。

「わたしさう言つて下さると、言つて終ひたくなることがあるんですの。この間まるで知らない方からお手紙が來ましたの。丁度、朝だつたのでわたしの手に入つたんでしたけれど、ほんとに困つたんですの。それに私の住所をどうして知つてゐるのか不思議に思ひましたの。」

とお春は言つて好いか惡いかと思ひ迷つた末に、たうとう言つたやうに、割合にしんみりと言つた。彼はそれを聞くと、もう手が廻つたのだなといふ氣と、いつかの母親の言つたやうに朝など能く家の前に、標札を讀んで行つたらしいマッチの棒が落ちてゐることがあると言つたことを思ひ出して、何故今まで彼にそれを匿してゐたのだと言つて

「どんなことを書いてあつたのだ。」と問ひながらぼんやりした目を見つめた。

—編　編—

春子は言ひにくさうにしたが、すぐ答へた。

「ただ、歸りに公園で待つてゐるつて場所が書いてありましたわ。その日、お母さんに迎へに來てもらひましたの。」

「その手紙の返事は出さなかつたんだね。」

「え。いつかあなたに挨拶したおしげさんて女給さんにお話して、もう破いて終ひましたの。もつと早くあなたに言はうと思ひながら、きまりが惡くて言へなかつたんですもの。」

と、やはり女らしく隱してゐたのだ。

「つまり春さんは其麼ことを何でもなく思つてゐるのでせう。だからいけないのだ。もう春さんは目をつけられてゐるのだ。」

と、彼はお春が澤山の女給のなかでも、秀れた縹緻を持つてゐることを思ひ合せた。

「どうかするのでせうか。」

とお春がぼんやり言つたので、彼はやや呆れ氣味になつて「どんな事つて、一口に言へば墮落させるのだ。ほんとに最つと僕に何も彼もあかしてくれるやうにね。そんな約束ぢやなかつたかね。」

いくらか春子を詰るやうに言つた。

「これからみんな言ひますわ。おしげさんなど隨分いろいろな人から手紙をもらつてゐて、みんな破いてしまつてゐるの。」

「さう。あの人は快活な人だからね。さうした方がいいんだね。あの人は僕たちのことを知つてゐるんぢやないか。」

と、いつもおしげさんが彼が二階へ上るとそれとなく春子に言ひに行つたり、廊下で會つたりすると、微笑して挨拶したりした。頰のところに大きな黑子があつて勝氣なとこがあつた。

—編　編—

「知つてゐるやうですわ。わたしとはたいへん仲がいいのよ。おしげさんにも男のお友だちがあるの。こんど敎へてあげますわ。毎晩來るの。西洋料理店の息子さんだつて——。」

「どんな男かな」と豐はいつも毎日來てゐるらしい顏觸れを考へたが、一人、いつも默つて壁の方の椅子に坐つてゐる眼鏡をかけた黑いソフトを冠つた男を思ひ出したので「その人でないか。」と言ふと

「え。そのひとよ。知つた方なんですか。」

「知らないけれど毎晩來てゐるらしいね。」

「毎晩いらつしやいますの。わたしにも何時も挨拶なさいますの。」

と言つたので、彼はぎつくりした。お春はこれだから危いとも思へた。

二人は田原町の停留場をよこぎつて本願寺のぬけ道へはいると、ひよいと振顧つたお春はさつと顏色を變へて、靑く震へるやうな聲で

「また先刻の人が尾けて來たんぢやなくつて。」

と言つたので、ふりかへると二人の黑いマントは、下寺が軒をそろへた境內のとある土藏の陰の暗いところに素早く隱れたのを豐はすぐ目に入れた。同時にしまつたと心で小さく叫びをあげながらも、女と一しよに歩いてゐる弱みが勝つて烈しい不安に襲はれはじめた。さつき、彼等の姿をまいたと思つたのが間違ひで、あの時から執拗く見え隱れについて來たのだ。

「やつぱり先刻の奴だ。いやにしつこい奴だ。少し急がう。落つついて——走つちやいけない。」

彼はからだぢゆう、不思議な緊張された寒氣と、危險な或る豫感とに震へながらすぐ白い塀に沿つて曲ると、塀のきわから

「春さんは顏を出さないほうがいい。」

と言つて彼女を背後に隱れさすと、そつと塀の角から眼だけを出すやうに、お

づおづと前方を見ると、同じく向つ側の二十間ばかりさきの土藏のかげから二つの顔が、くろぐろと此方を窺つてゐるのが見えた。豐は烈しい不安と不愉快と、ある殺伐な、暴力的な威嚇をその夜の寒さとともに少しづつ感じ出した。もう十一時過ぎのこの本願寺の中道は、しんとして人通りさへなかつた。ただ、江戸時代の寺院のある一部を寫し出したやうな、土藏作りの開き窓や、下寺の門構へらしい低い扉などが、ぼんやりした星あかりの、あるかないかの明るさのなかにそれらの總てが寂然として靜まりかへつてゐるのが見えた。すぐ其處の裏門にはげしく電車の往來する音響がしてゐたが、ここへ一歩入れば全てが水のやうな靜謐な領分になつてゐた。お春はふるへ聲で

「どうしたらいいんでせう。だいぶ遲いやうですからどんな目に遭ふかも知れませんわ。」

と言ひながら縋りつくやうに、からだを縮ませて近づけた。

彼はへんに喉にひつかかるやうな掠れ聲で、すこし慌てながら

「大丈夫だ。ぢや早足で此處を出て終はう！。」

と、わざと豐が此處にゐて、あつちを窺つてゐることを思はせる爲めに半身を塀のそとに出しながら、すぐ引ッ込めると、次の塀を折れていきなり大通りの門へ出た。そしてぢつと耳をすますと、まだ下駄の音がして來なかつた。ただ、しづかに田原町の湯屋の高い煙突から、ほそぼそと夜空よりも白い煙が長く街路から家並みの方へながれてゐるのを寂しくながめた。

「さうだ。逆に歸つてゆけばいいのだ。」

と明るい大通りを田原町の停留場へ目がけて二人は走るやうに歩いた。急げば急ぐほど不安が一歩づつ背後から追つてくる樣な氣がしてならなかつた。「やはりかうして女と一緒に歩いて居たから、こちらに弱みがあるのだ。さうして何かしら或る恐怖をかんじるのだ。凡ての世間から隱れてかうしてお春と逢つてゐるか

ら、縁もゆかりもない奴までに追はれるのだ。その上、彼女が女給であるといふ一般的な解釋から彼等も追ひかけのだ。彼等はこのお春が私一人のものでないといふやうな氣で（しかもああいふ活動館内に勤めてゐる理由からだ。）私一人の手からもぎ取ららうとするのだ。とせかせか考へながら、スケート場の裏から例の廣い通りへ出て行つた。

少し行くと、いつものやうに占師がぼんやりと蒼白い顔を星空につつ立てて、ざらざらした笠竹を逆に握つてゐた。

「また彼奴に會つた。彼奴は私とは何の縁があるのだ。」

と心で叫びながら行くとお春が

「ぢつと見てゐるわ。まあ、いやな……。」

と、そつと囁いて慌へて通り越した。

こんどは完全に尾行者をまくことができたので、私はお春を家の前まで見送つ

た。

「何も彼も僕にこれから話して下さい。隱さないでね。」

「え。みんな申しますわ。」

と二人は別れた。

豊はすぐ車阪の鐵道學校の前から上野へ出て歸らうと急いで行くと、すぐ後から激しい足音がけたたましく仕出した。ふりかへると黒マントを着た先刻の男がいそいで彼に何か言つてゐるらしく呼び立ててゐた。彼は足のさきから頭のてつぺんまで、殆ど惡寒にひとしい戰慄をかんじた。それでも、彼の足はぴつたりと停められた。

「何の目的があつて追つて來たのだ。一種の恐喝でなければゴロッキだ。」と思ひながら、ひろいマントを着てゐるので幾何か不恰好な其泳ぐやうに走つて來る二人連れを眺めた。

彼等はすぐ豊の前まで來た。その瞬間、彼は鐵道學校の柵を後にして、すぐ口を切つた。

「僕を呼んだのは君たちですか。さうして僕に用事があるんですか。」

と比較的落ちついた聲で言つて對手を熟視した。一人は背丈の高い眼鼻立ちの整つた男で、どちらかと言へば美しい男であつたが、低い方は額と顎とを上下から壓し潰したやうな平つたい顔であつた。高い方がすぐに

「すこし用事があるんです。君は僕たちが跡を尾けてゐたことを知つて居るだらう。それに君は一人でなかつた筈なんだ。」

と、じろりと低い方の男を一寸見て、更に豊に目をうつした。顔立ちの優しい割合ひに圓らな目が狡猾さうに豊の目に食ひ入るやうに注がれた。

「勿論、女と一緒だつたが、それが君に何の關係があるんですか。君もいふやうに、さつきから僕等のあとを尾け廻してゐて何の用事があつたのですか。」

と、彼は膝がしらの震へを踏み締めるやうにしながら言つた。

「それに就いて話があるんです。實は（と言つて彼は烏渡言葉を躊躇つたが）彼の女を僕等二人で保護してゐるんです。君も知つてゐるだらうが公園界隈は不良少年の巣みたいな處だからね。隙があつたら誘惑しようと待ち構へてゐる奴等が多いんですからね。で、僕らはあの女を保護してゐるんです。かう言へば皆なおわかりだらうと思ひますが……。」

と、もの馴れた對手につッ懸るやうな調子を含んでゐて、それで、どこか尤もらしい落着きと故意とらしい優しさを仄めかした聲で言つた。

「ぢや君はあの女の親類ででもあるのですか。それとも……。」

と言ひかかると、彼は、直ぐに上から覆ひかかるやうに

「それよりも君は彼の女をどうして知つてゐるんです。それから先に聞きませう。」

と、ややッンとした聲で言つた。

豐はすぐに冷たい微笑をうかべながら

「あの女は十二三位からの友だちなんだ。それに母親も知り合ひだし却つて僕の方で保護してゐるやうなものです。君の保護も感謝するが、しかし僕が居るから殆ど君の必要がないわけだ。」

と言つて對手を凝視しながら、對手が不意に飛びかかつたときの用意のために、そつと外套のボタンを一つづつ外しはじめたが對手はすぐにそれに目をとめた。何よりも落ちつき拂つてゐるので、いくらか、とつッき惡いところがあつたらしかつた。

「けれどもですね。保護はこれまでづッとやつて來たんだし、それに僕らは館の事務所とも通じ合つてゐるんです。君が飽までに彼の女との關係にうしろ暗いところがないやうに言ふが、僕等は明朝にでも事務所へ言つて彼の女を止めさせることが出來るんだ。」

と、だんだん語尾を荒荒しく言つたが、「此奴はうまく急所をつかんだ。此奴と爭ふより上手く此奴の目的を遂げさせてやればいいのだ。」とすぐ豐は其處に氣がつくと同時に、こんどは此方から鋭い言葉を一つ叩きつけて置いてから目的を遂げさせてやつても遲くないと考へた。

「君の言ふことはよく解つてゐる。しかし此方では誰かが彼の女の家の標札を夜中に覗いたりした奴がゐて、翌朝、マッチの棒が落ちてゐたと母親が話してゐたことがあるんです。そんな事情（それは君だちでなからうが）もあるんだ。その人間も僕は知つてゐるんだ。（豐はその時明かに對手の胸にぎつくり應へたらしいのを眼を瞬かしたことによつて感知した。）僕は君等より最つと惡い上手な人間かも知れないんだ。だから今夜は君等が僕を呼び止めた目的を話してくれないか。それが一番早わかりだから。」

—編　編—

と言つて、豊は卷煙草をとり出した。と、脊のひくい方の男が膠もなく、打解けて「君一本呉れませんか。」と手を出した。高い方にすすめると、これも一本抜き取つて火を點けた。

「さうだ。君の方でさう碎けて出てもらへば話しよいのだ。實は僕等は困つてゐるんだ。君が今僕らを少し樂にしてくれれば今後とも彼の女に間違ひのあつた時は知らしてあげてもいいし、保護してもいいんだ。」

と下手に出た。豊はすぐ

「保護はよしてくれたまへ。そのかはり頼みたいことがあつたら又頼むから。」

と言つて「どれほど要るのか。」

といふと

「ともかく一杯飲まうぢやありませんか。」

と言つたので豊はすぐに内懐中から紙幣を三枚ばかり抜き出して

「これだけしかないんだ。今夜は君たちに負けた意味で歸るから快よく之で別れて呉れたまへ。」と

言ふと、譯もなく微笑と冷笑とを交へながら

「初めての君に散財をかけてすまない——。」

と、地べたに落ちた一枚をひろひながら言つた。豊は手ッ取り早く踵を返した。

「ぢや失敬する。」

と言ふと

「君の健康を祈る。」

と、田舍書生のやうな言葉で言つて阪本の方へかへつて行つた。低い方は初めから默つて居たが金を見るとにたりと微笑して正直さうに目禮をしてゐた。大した奴等ではない。却つてあいつ等を上から食つてかかるやうにしてやつたからよ

—編　編—

かつたのだ。」と思ひながら、車阪の交叉點へ出ると、もう電車の車庫がへりの青い燈をともしたのが來るばかりで、人通りも絶えてなかつた。人家の屋根には、もう霜が下りたらしく三月とは云へ、冬のやうに嚴しく寒い晩であつた。

一月に一回の遲出の日があつて、お春は家にゐたので豐はその日も入谷の狹い小路の奥をたづねると、すぐお春がでて來た。が、女ばかりの此處の玄關に古くすりへらした赤皮の靴がならべてあつたので、彼はいきなり胸のところを突きもどされたやうな氣になつて

「いらつしやいまし。お入りなさい。」

と何氣なく言ふお春の顔をじつと見据ゑて、その表情から自分の訪問に對する或る動搖を見やうとしたが、いつものやうに、あどけなく、ぼんやりした目をしてゐた。豐は靴を指して

「誰か來てゐるんですか。」

といふと

「活動の看板繪を描く方なの。構ひませんわ。」

と言つた。豐はすぐに平氣でそんなものと話してゐる春子のお人よしを忌忌しく感じ出した。同時に不愉快なむらむらした暗い氣分になつて、彼は歸らうとした。

お春はへんに甘えたやうな、痒いやうな聲音で

「あの方が居たつていいわ。ね。入つて下さいましな。」

と豐の顔をさし覗きながら、引き止めるやうにした。

「だつて知らない奴と話をするのが厭なんだ。」

と、自分だけがこつそり訪ねて來る美しい住家を荒されたやうな氣と、別なお

春と畫家とに對する烈しい嫉妬とを同時に感じながら、突き放すやうに言つた。

すると、お春は、その時、やつと畫家と自分とが先きに居て話してゐたことが、豊に對して濟まないと感じ出して

「ね。折角いらしつて下すつたんだもの。(と言つて)すぐ歸つて終ひますわ。主にお母さんと話してゐるのよ。わたし、あつちでお仕事をしてゐたんですもの。」

と幾らか甘えるやうに、嘘のない所を言つてゐるらしかつた。豊はだんだん心がなだめられてきて上つた。母親は

「まあ、よくこそ、この間は失禮しました。」そして「此方は活動の方の繪を描きなさるんですつて——。」と紹介した。

「あさうですか。」

豊がちらと見ると、黒の背廣で、ネクタイを日本結びにして髪を分けた、まだ若い男で、畫かきらしい短い髭をもつてゐた。彼を見ると、妙に氣取つて澄して

默禮をした。その目付は、あきらかに彼といふ侵入者を喜ばない落ちつかない瞬きを續けながら、どこか疑ひ深さうにもぢもぢして、ときには陰險さうに白眼して豊を見てゐた。

豊も一種の窮屈な空氣をかんじながらゐると、畫家は

「生活の方便から看板畫を描いてゐるんですが、實に不愉快ですよ。自分の眞統の仕事ができないと思ひますとね。」

と話しかけたが、豊は一向乗氣にならなかつたので

「は。さうでせうな。」

と言つて、すぐ母親の方へ向つて話しかけた。すると、お春がつぎの間から出て來て

「わたしの室へいらつらしやらない？。」

と小首をかたむけて言つた。豊はすぐ立つて、畫家をあとにして、春子の室へ

入るとお春が

「早くお歸へりになればいいのにね。いつでも長くいらつしやいますの。」

「どうして訪ねて來るやうになつたのだ。」

と尋ねると

「館の事務所で時時會ふでせう。お母さんにもね。そんな傳手をきつかけにやつていらつしやるの。」

と、お春は言つて「わたし彼の方きらひ。」とささやくやうに言つた。露はに、こんなはつきりした言葉づかひをしなかつた彼女は、何時の間にか言葉の切れがよくなつてゐた。お春の室には小さい火鉢と、小さい机や鏡臺などが置いてあつて、どこか女らしい室になつてゐた。殊にきちんと疊んだ外出の着物と重ねられた紅い長襦袢が、際立つて室中の色彩を集中してゐるやうだつた。何故か女の着物を見ると觸つて見たい氣のするものであるが、豐もおもはず其襦袢をそつと微

笑しながら抓んで見るとお春は、微笑つた。そして小さな聲で

「此間の晩は怖かつたわね。」と囁いた。

けれども車阪で强請られたことを豐は默つておいた。

「でもあの晩はるさんは恐ろしく震へてゐたぢやないか。」

「ほんとに恐かつたわ。どうなるかと思つてゐたの。——でも最うこれからは恐くないわ。」

と言つて、慣れたものの强さを顏に現した。かうして度が重なつてゆくごとに女は大膽になつて行くのだとも思へた。

隣の室で畫家の歸るらしい氣配がしたが、お春はわざと出て行かなかつた。豐はお春が見送りに出てくれなければいいがなと思つてゐた通り、

「もう歸つたらしいわ。いいわね。」

と言つて、少し媚びるやうな濃い親密さと信頼とを現した。それが、これまで

にない或る不思議なコケッテッシュな美しさを彼の心につたへた。決してこれまで、こんな美のなかつたお春であつた。

お母さんが、その時入つて來た。

「お歸りになりましたよ。春子も春子だ。ちよつと位ゐ見送りしたつてよささうなものぢやないか。」と言つて豐に向つて「あの畫家の方はいらつしやいますと、そりや永いんですよ。何も用事がないんですのに。」

と言ふ心には、きつとお春に近づきに來るのだといふ氣が、殆ど同時に母親と豐とに感じられたのであつた。けれどもお春には其那深い意味のことは解らなかつたらしかつた。

豐は何氣ないやうに

「さうですか。きつと暇なんでせうよ。」

と白ばくれて言つた。が、その時母親はやはり豐をも少し氣にかけて、お春と二人きりで置くのを危ながつてゐたらしかつた。國で彼の實家を知つてゐても、東京で下宿して居るといふ事が母親にとつてはやはり不安な或る放縱な生活を豫想させるのであつた。他の人に比べて信じてはゐるものの、母親としての目つきの中では、いつも油斷ない監視を豐とお春との微笑する隙間にも注いでゐるらしく思はれた。

「活動寫眞館などに關係のある人は素性のよくない人が多いんですからね。春子さんなぞも、何か他處で仕事を見つけて勤めた方が安心ですね。」

豐は笑ひながらいふと母親は

「そりや本統のことですよ。一日も早くさうしたいと思つてゐて、つひもう二三ケ月ばかりといふ慾が出ましてね。」

と言ふと、春子が

「でも間違ひさへなければいいわ。何をしたつて同じですもの。」

母親は抑へるやうに

「そりやね。間違はあとで氣のつくものなんだからね。お前もよく心に滲み込ま

して聞いてゐなければ……。」

と少し愚痴ぽくなつたと春子は言つて微笑ひ出した。しかし豐は今のお春が館にゐるより他の職業に就く方が、どれだけ彼自身の心持ちを救ふか解らなかつた。館は危險だ。——と思ふ傍他の處に勸めれば彼麼に自由に逢へないことを考へると、今度は苦しみが二倍するとも思はれた。しかし、見す見す彼處にゐては自分の目のとどかないところに、もう彼女の肩を目掛けて下ろされる手が幾つとなく、彼女の毎日肥つて行くやうな華やかな肉體の熟して行くのを待つてゐるやうな氣もして耐らない焦燥を感じた。

「え、そりや分つてゐますわ。」

とお春が答へてゐた。

豐はお春の家を出るとすぐ東京館へ行つた。おしげさんが廊下で出會すと

「いらつしやいまし。」

と靜かな頬笑をもらした。この女もやはりお春と同じ年輩で、同じい肥りざかりの揉みつけたやうな厚い頬をしてゐた。

いつものところへ坐ると、すぐ、おしげさんの友だちだといふ若い男が、ぴつたり壁に添つて坐つてゐるのを見た。向ふでも、豐のことを知つてゐるらしく、素知らぬ振で其の方を偸み見てゐた。——それから館の株主だといふ金縁眼鏡をかけたトンビを引つかけた若い男が、ドアのそばに立つて女給と何か話しながらも頻に女給を笑はせて居た。その中にお春が居りはせぬかと見ると、ドアの蔭にゐるらしい氣がした。金縁をかけた男はこれまで幾人となく妻君を換へたり女給に

手をつけたりして新聞に書き立てられたことがあつた。それほど色魔に近い容貌をもつてゐた。やや高い鼻筋に架けた眼鏡は、その淺黑い顏色の釣合上、ことに厭味な勿體振つたところを見せ、片手に金口の紙卷きをもちながら、何か戯談を言ひながら女達を笑はせてばかりゐた。其處にお春が居なければいいがと思つてゐたものの、どうしたはずみか、笑ひながらお春が其處へぽつかりと顏を現したとき、豐は急に唾でも引つかけたいほど憎憎しさと、心持の上に教養のないものの秩序のない無邪氣とを恐ろしく感じた。しかも能く見てゐると、その男は戯談や輕口を言つてゐながら、その目付の中心が絶えずお春の顏に注がれてゐるのを見たとき、もう自分の知らないうちにお春に目をつけてゐるなと思つた。事實、東京館の女給連のなかでも縹緻の上からは、明らかにお春が最も秀れてゐた。さうして彼女が東京館ばかりではなく、軒をならべた總ての活動館の女給を通じて最もよく肥え然うして何よりも娘らしく溫良に人人から眺められたことは實際で

あつた。

豐は早く彼の男が彼の視界から遠のくことを祈つてゐたが、却却去らなかつた。其中におしげさんも交つて笑つてゐたので、壁の方にゐる男は、絶えずセカセカと落ちつかない苛苛しく立たり坐つたりうしろ向きに坐り工合を換へたりしてゐるのが、その內心のいらいらしさを十分に現してゐた。豐にはよくその心持がわかつた。そのうち、一際高いお春の聲らしい笑ひ聲がして來たので、彼は自分の頭を持つて打ち振られたやうな劇しい怒りを感じた。そればかりではなく、彼女によつて自分の感情が一種の玩弄品のやうに取り扱はれてゐるやうな氣さへした。なぜ此心持がわからないのか。とも心のうちで叫びながら豐は耐り兼ねて便所へ行つた。

そのとき、お春はふいと豐の方を見た。豐は苦しげな悶えた烈しい目付をして見つめた。それは明らかな激怒の現れであることが彼女にはよく讀めたらしく、歸りには最うその群をはなれて獨りで窓際に立つて、ぼんやり叱られでもしたやうな可憐な、いくらか打ちしをれたやうな目で彼をぢつと見てゐた。彼はやや氣をゆるめてゐながらも、なほ猛り立つたやうな怒をすぐにおさへることが出來なかつた。そのなかには露はな野蠻な野性があらはれてゐたことも實際であつた。彼は椅子にうづくまつて、つぎからつぎへと移る映畫に目をとめた。蒼く顏へるやうな怪しい人物の群れや、うすぐらい物置のやうな小さな建物、そこにある白い道路、さういふものが目にはいつたが、それらの聯絡がしつかり頭にはいらないほど、屢屢豐はドアの方をかへり見た。そこには、時時、お春があらはれた。さうして豐の方を凝視めてゐた。さッきの怒りについて彼女がだんだん豐の心持の理解が出來たらしかつた。鈍なほど、ゆつくりと生れたままの資質に動いてゐ

る彼女は、すぐに對手の心——豐なら豐の心を見透すことが出來なかつた。やや時間を經てから何時も解りかけるらしいのである。今も彼女はその理解に辿りついた洗はれた目で、豐に謝まるやうな光をしづかにじませて、彼の方に向けてゐた。一種の物悲しげな、自分で自分の心持の扱ひやうに困りぬいてゐるやうな物問ひたげな目であつた。「あの目は處女のもつ不安げな目だ。まだ、この混闘の巷の手に彼女は委ねられてゐない。七年前に見た目つきとは違つてゐるけれど、しかし其ぼんやりした少女らしいところは彼の時とすこしも變つてゐない。」と彼は、すぐ、彼女にさう物悲しげにするな。いま總てが彼にとつて理解されてゐると言ひたく思つた。

しかし間もなく不安と憂慮とは再び豐をおそひはじめた。それは今まで氣づかなかつた彼とは反對の側の椅子の後方に、けふ晝間お春の家で會つた畫家を何心なく不意に見つけ出したからである。彼は椅子の後方に、いつごろ入場して來た

ものであるか殆ど隠れるやうに平たく坐り込んでゐたのだ。豐の目がはしなく彼の方へそそがれると、かれもまた、素知らぬ振りをして映畫の方に目を凝らした。それがいかにも卑劣に陰險に又た非常に不愉快な氣もちを豐に釀させた。さう思ふせいか彼も又た屢屢ドアの方に、その瞳を時時凝らすのであつた。それは必とお春の姿を求めてゐるのだと思ふと、豐は不安をはげしく感じ出した。しかも其時、豐は自分の椅子隣りの學生や、ドアに近く坐つてゐる人人が一樣にお春の方へ眼を向けるごとに、彼女の容色が次第に凡ての人人に吸ひ取られ、また慫めつくされでもしてゐるやうな氣もちになるのであつた。

軈て其等のどうにもならない感情が、今は一種の憂鬱な悲しげな、うち沈んだ心になりはじめたのであつた。ふと、お春に會つてから特に愛を感じるといふ迄に至らない前に、彼はああした彼女の職業によつて衆人に顏を晒すことによつて、ただ激しい嫉妬が先きに立つて彼をぐらぐらさせるのであつた。その嫉妬は

日をふる毎にはげしくなつて、いまは彼の心の全てにヒリヒリと痛んでくるからである。映畫につれて鳴る音樂の中からも、ことに感情的な、安つぽい曲であつてもそれがすぐ彼の心にまつはりついた。しかも場内にある全ての青い覆ひをかむつた電燈、ことにいつも人氣のない寂然とした三階にともれた冷たさうな明り、薄暗がりに默つて映畫に向き合つてゐる種種な人間の黑い頭などが、皆今の我身に關聯されて一種の悲しげなものになつて見えるのである。しかも自分自身の生活のどうにもならない、其日ばつたりで仕事もしないでゐるとや、さびしい下宿の一室や……またはお春と一しよにゐた海岸などが、或ひは映畫などから唆かされながら頻に思ひ出されるのであつた。

「私自身は手のつけやうのないのらくら犬だ。墮落しつくしたやうな人間だ。いつかの不良少年にさへ上手に見えるほど、すれつからしだ。私は春子の墮落を防がうとしてゐるのは實に冷笑に値することだ。」と考へ沈んで行つた。

活動がはねると豐は池のそばの柳の木かげに（まだやつと芽立つたばかりの）佇んで見てゐると、向ふ側の活動館の横手にさつきの畫かきがぢつと佇んで、東京館の方を見詰めてゐたとき、彼は背中に汗するほど驚いた。やはりお春に目をつけてゐるのだ。歸途を待ち伏せてゐるのだ。東京館はいつも他の館とは遲れる上に、殆ど十分ちがいに此通りが、ぱつたりと人通りがなくなるほど靜かになるのであつた。

あちこちの館から女らはみな小さな風呂敷包みを抱へて、迎へのものと歸つてゆく。みな黑い半洋裝の館のしきせを脫いで、普通の着物を娘らしく着けて行くのを見ると、この騷騷しく賑やかな雜沓の一日の終つたことが感じられた。裝飾電燈も今はみな消された。眩ゆいばかりの明るい中にある時よりも、暗みがかかると安

つぽい建築にどつしりとした重みが加はつて行つた。——そのとき畫家は、何と思つたか物蔭に隱れやうとしながら、反對の小路へ走るやうに行つた。すると、東京館の入口からお春と迎へのお母さんとが出て來た。豐は畫家がお春一人で歸らないことを知つたので、すぐ姿を消したのだと思ひながら、親子揃つて歸つてゆく後姿を眺めた。二人はいつも行くやうに入谷の方へ行つたが、もう諦めたのか畫家の姿が見えなかつた。これで凡てが圓滿な夜になつたのだ。今夜母親が迎へに來なかつたら、彼と畫家とが自然諍はなければならなかつたのだ。彼は安らかな心を抱いて電車道へといそいだ。

豐は毎晩のやうに彼女を尾行したが、いつも母親が迎へに來てゐるので、會つて一緒に歩く機會がなかつた。ある晩など、館内をぶらついてゐると母親に行き會つたりしたので、彼は氣まり惡く感じた。そのとき母親は明確に彼がお春の歸りを待ち伏せることを感づいたらしく、いくらか不安な目つきをして彼を眺めてゐた。

櫻がちらほら咲きかけたある日、お春の家を訪ねると母親はいつもよりも素氣なく、わざとらしく默り込んでゐるらしく見えた。お春も噤んで、母親に氣を兼ねて、むんづりとしてゐた。けれども、時折、きまり惡げな微笑を母親に隱しては、豐に送つてゐたが、白けた味のない頰笑みであつた。

「少しお話しにくいことがありますの。でも、お腹立ちになつてはいけませんよ。」

と思ひ切つたやうな振で、かう母親が言つて苦しさうに作り笑ひをした。豐はすぐに或る宣告的なものを豫覺した。が、

「どんなことなんです、言つて下さい。」

と、わざと平氣らしく言ふと

「實は——春子もいい年頃になりましたから、あなたがお遊びにいらつしやいますことは闘ひませんが、母としては、春子の仕事がああいふ勤めをしてゐること

ですから、世間から詰らないことを言はれますと困りますからね。」

豐の顏を不安さうに見い見い、彼が怒り出しはせぬかと心配さうな目つきをした。(だから餘り度度訪ねて下さると、春子のためになりませんからね)と言ふんだらうと、彼は欺されたやうな、撥き付けられたやうな寛やかな重い怒りを少しづつ感じ出したが、わざと落ちついて

「知らない人はつまらないことを言ふんでせうから、私もこれからは少し遠慮しませうよ。仕事もありますから——本統に世間は煩さいものですからね。」

と白ばくれると、母親は案外彼のくだけたのを機會にして飛びつくやうに言つた。

「この長屋でも隨分變な噂をする人があるんですよ。廣いやうで狹い世間ですからね。」

豐はそれをききながら、ふと、お春を見るとぢつと俯向いてゐて、彼の視線を

逃れやうとしてゐた。(母親は或はお春と媾曳をしたことを知つてゐるのだ。いつか館の前をうろついてゐて母親に行き會つたりしたのが、拙かつたのだ。)と彼は思つた。やはり、これきりで此處の家へ來まいとも考へた。

「世間はいやな所ですね。」

と、取つて付けたやうに言つて、眼を不愉快に反らしたまま豐は立ち上つた。

「お歸りですか。どうもお關ひしませんでした。」

と別に止める氣はひもなかつた。彼は下駄をひつかけながら、初めから默り込んでゐたお春が、そつと目禮をしたのを意味深く考へて、母親に別れた。

豐は入谷から淺草の方へ歩きかけてゐた。お春との間がぷつつりと下駄の緒の切れたやうな寂しい氣がした。母親はきつとお春にいろんな詰らないことを言つて居るにちがひない。どうしてもお春に會はなければならない。會つた上で話をしようと思ひながら活動館の白いペンキ塗の建物の一角が、あらはな春の日に埃りぽく照らされてゐるのを、夜とは別な白白しい寂しい心でながめながら、ゆつくりと氣だるく歩いてゐた。

その通りが公園近くになつたところに、一軒の古い藥種屋があつて、守宮や、龜の子や、蝮や、蛇を生きながら硝子の箱に入れて店へ出してある家があつた。狹い店の天井にも蛇の干したのや、木の根の乾かしたのなど煤まれに吊してあつて、一種の陰氣な暗がりが其等の天井の底や、正面の藥品類を收めた棚のすみなどに、こんもりと毎時も夜のやうに籠つてゐて、そこに坐つてゐるお主婦さんの奇妙に白茶けた疣疣した顏が、時とすると晒木綿のやうに、艶のない蒼白い顏を、その殆ど蒼ざめた首だけを、それらの藥品棚の横手から出してゐた。

豐はむづむづと一端から一端まで、しづかに動きかけてゐる長長しい生きもの

を、硝子越しに熱心に物珍らしく眺めてゐた。しかもこの都會の眞中で、ことに藥種屋の店先に飼はれたこの生きものは一體何をたべて生きてゐるのだらうと、その食べものを知ることによつて此の生きものの眞個の生命が解るやうに思はれ、その上、人間の手に飼はれ親しむといふ物懷しささへ考へたのであつた。三角形に尖つた頭から、脈脈として次第に波のやうにうねつてゆく動きやうは、ぢつと眺めて居れば居るほど自分のからだの中にも、このやうな長長しいものの動きやうを、むづ痒く感じ出してくるのであつた。

午後の日光は移り移つて、いつの間にか硝子を透して黄ろい一片の鱗のやうに箱のなかにも射しこんで來た。蛇はその日光を感じたのか、すぐに鈍い頭をそろそろと擡げて、やはらかい春の日光のひとくれに照されるのを樂しむやうに、ちよろちよろと纖い美しい舌端を吐きながら、わけても小さい眼をうつとりさせるやうに、あぶら切つた身體をだんだんに日光の方に歩ましてくるのであつた。足

のないやうな、どこか啞と盲とをつきませたやうなこの寂しい生きものの命にも日光にうたれる愉しさが、今限りなく喜ばれてゐるらしかつた。彼はあまりの懷かしさと物珍らしさとに、思はず指さきで硝子の上を一つ二つ叩いて見せると、敏感な生きものはすぐ頭をすこし擡げてその方をみつめた。豊は何故か其の時、この生きものが大きな鼠の持つやうな怪しげな耳をつッ立ててゐるやうな幻惑を朧に感じ出して、何時までもその身の伸びやうや縮みやうの微妙さにしみじみ見とれた。

すぐ箱の上には、蝮の瓶詰が冷たさうに置かれてあつて、それが彼の鼻のさきをひいやりと撫でたやうにさへ凍え上つたもののやうにながめた。——と、すぐ奥には、例の白ちやけたおかみさんが、ろくろ首のやうに坐つてゐて彼の方を見てゐた。豊はそのとき叱られでもしたやうに、つと窓からからだを離して活動館の通りへと足をすすめた。

春はここの總ての建物にも池のまはりの柳にもあらはれ初めてゐた。豊は活動寫眞の看客がみんな共通な寂しさうな痣のやうなものを顔にくつつけながら、みな看板をながめたり寫眞の張り出しを見つめて居るのを見た。彼は殆ど機械的に東京館の切符を買ふと、階段をあがりはじめた。誰でもさうであらうが彼の階段を上がる時、映畫につれて鳴る誘惑的なピアノの最初の音をきく位ゐ、看客にとつて烈しい魅力を迫らせるものはなからう。豊もさうした心を感じながら第一階を上りつめると、最うすこし前に出勤したらしいお春が白い壁にもたれて立つてゐるのを見た。お春は今日晝間の母親のことを考へ出して、すぐに彼に素早く囁いた。

「晝間のお母さんの言つたことを氣にかけないで頂戴ね。」

さう優しく言はれると彼は默つてプログラムを受取つて微笑した。

特等も込んでゐて何處も彼處も一杯であつた。人いきれと春になりかけた芳ぐ

はしい溫かさと日光を閉した場内にも漲り切つてゐた。彼はこれらの蒸しあがるやうな重い空氣を制するやうな氣もちで、又しても、金縁眼鏡のいつかの男が、ドアの所で女給を對手に饒舌つてゐるのを憎憎しく眺めた。女給らも面白がつて妙に恁う媚態をつくつたやうな愛想笑ひをつづけてゐると、眼鏡は得意になつて幾本も煙草をのみ散らしてゐた。が、不思議におしげさんの姿が見えなかつた。勝氣で優しさを沁み込ませるやうな顔が、今日は見當らなかつた。お春も豊に氣をつかつて眼鏡のそばへ寄らなかつたやうだつたが、自由に事務所へ出入する彼のことであるから、どんな機會を利用してお春に接近するか判らない。豊の知ることのできない他の時間が、彼れとお春との間にあるやうな氣がして仕方がなかつた。氣のせいかお春が小用を達しに行くときに限つて、眼鏡がきつとあとから跟けて行つたことが、今日までで幾度となく見たのである。

しかも今もいま、さうした小用に立つた彼女を追ふやうにして眼鏡が、行つたことを考へると、映畫中は少しも人氣のない不淨所や、それに引き續いた化粧室の靜かな椅子などが目にちらついて落ち着かせなかつた。間もなくお春が出て來たが、妙に襟を掻き合せながら（それが偶然だつたとしても）歩いてゐるのを見ると、豐の頭は水を打つたやうにしいんと靜まり返るのであつた。それに續いて眼鏡がいくらか蒼いやうな顏をして出て來たのも、彼の目に燒きつくやうに永く殘つた。これらの絶え間もない嫉妬の精神は、時には緣もゆかりもない辯士の空空しい演說振りを憎惡させたり、又奇體な帽子をかむつたり、思ひ切つて流行型の服を着込んだりした紳士まがひの男などにも、殆ど理窟なしに注がれた。豐は彼自身の思念の領域が、彼女とその周圍を見渡すとき、もう、嫉妬の感情なしには眺めることが出來なかつたのである。骨のあるやうで無いやうな彼女の自分に對

する心、それが殆ど彼以外の人にも注がれやすいやうな、特別な證據をも見ることのできないやうな愛にも想像されるのであつた。

豐は何よりも彼女の肉體と自分との干涉を濟ませる安らかさを握りたいと思つてゐる傍、彼にとつて此處に妙に潔癖な、たとへば然ういふ肉體上の關係が、彼女をして自分から去らしめる原因を與へないかとも考へられたものであつた。（當時若かつた彼が常に男女の關係が肉體的に終始するといふ理論をもつてゐたに拘はらず、事實上、肉體的の經驗の尠かつた彼は何よりも肉的に彼女に突進することが、彼女をして彼を汚はしい男のやうに思はせばせぬかといふ不安と恐怖とをもつてゐた「極めて不自然な愛」であつたからである）とは言ふものの、彼女の烈しい肉體の肥りやうは偶偶彼をして肉的本能を起させたに拘はらず、彼はさういふ時、最も不自然な淫樂を自分自身の中に見出し、且つそれらを行ひながらも不思議に彼女の肉體には近づかなかつたのである。さういふ不自然な彼の空想

に近い（後から思へば）愛が、他のあの眼鏡との間に、それらのものが行はれてはゐはすまいかといふ懸念が、時に彼の腦裡を搔き攪すのであつた。

「私はただ一つのことさへすれば、恐らく彼女は私の所有に、しかも完全な所有になるのだ」といふことを考へ込みながら、矢張り、彼はああいふ汚い（彼は當時さう考へることによつて卑劣な自分を救つてゐたのだ）ことをすれば必然彼女から愛想づかされるにきまつてゐると云ふ心許ない、惱ましい妄念に閉ぢ込められてゐた。

同時に彼は何人よりも彼女の意志を自由にしてゐるといふことが、この數千の看客を前に置いてより以上に確めたい子供らしい氣もちになつて、手帳を引き裂いて、今夜お母さんが迎へに來ても、途中ではぐらかして是非會つてくれるようにと書いて、彼女が自分の横を通つたとき、いつものやうに手うつしに渡しておいた。それから十分ばかり彼女の姿がドアのところに見えなかつたが、間もなく現

れた。或は人氣のない廊下か、でなければ何處か特別な場所ででも讀んで來たのであらう。彼女の顏には明かに困惑した表情があらはれてゐた。間もなく看客が入つてきたので、お春はそれを案内しながら、彼の方を目がけて來た。お春が自分の右の袂とすれちがひに去つたとき、小さい紙片を豐は右の手に持つてゐた。廊下へそつと出て見ると、なるべくはぐらすやうにするけれど、それが出來なかつたらどうしませうと書いてあつた。母をまくやうに言つた彼の心には、一つには彼女が全く自分の言ふことを遣り通してくれるかどうかと云ふことによつて、自分自身のお春であるかないかを、しかも自分とい縁もゆかりもない群衆の間に居て知りたかつたのである。しかし此返辭はいくらか彼の烈しい先刻からの嫉妬や憂慮を慰さめた。のみならず溫かい愛情を酬いられたやうな氣がして、彼の變りやすい心はすぐに彼女を信じさせた。

活動がハネてから、彼女が館を出ると、すぐに母親がお春にぴつたりと添つ

て、人通りの多い中をゆつくり歩きながら、いつもの通りへ出て行つた。お春はときどき振りかへつて、だいぶ後からついてゆく豐を見て、豐との約束を履むことの非常にむづかしいことをありありと顏にあらはしながら、こころもち蒼ざめてゐるやうであつた。あまり度度ふりかへるので、母親も突然うしろを振りかへつて見た。豐はすぐ腰を屈めるやうにして前の方をゆく四五人づれの後方にかくれるやうにした。それが何氣なく振りかへつたのであるか、また、彼があとを尾けてゐることを知つて振りかへつたものか、どつちにしても彼は冷たい汗を脇のしたに感じた。……

例の占師の前で親子はちよつと立止つたが、お春が母親の袂を引くやうにして、幾度も急がしたやうであつたが母親は占つて見たいのか、ぐずぐずと立止つてゐ

た。と、お春は突然に菊屋橋へ出る廣い通りの溝際の暗い方をさして、素早く一疋の蝙蝠のやうに姿を消した。彼はそのとき頭から熱湯を浴びせられたやうな劇しい感動に震ひ上つて、殆ど馳け出すやうに母親が占師と何か話してゐる前を通りながら、ふいと（それは恐いものを見たさの感情だけだつたが）占師を見ると、かれは母親の小さい束髪の頭越しに、しかも此方をぢつと蒼く顔へるやうな眼で見詰めてゐた。其時豐はいきなり肩先を冷い刄物で斬りつけられたやうに縮みあがつて、溝際へ跳り出た。彼はさきへさきへと呼吸をきらして行つても、お春らしい姿を見なかつた。此通りは新開地のやうにぽつりぽつり瓦斯燈が點されてゐるだけで暗かつた。彼はもしやお春が道でもとりちがへたのではないかと、あちこち見廻すと、とある立樹のかげに、じつと立ち竦んでゐる彼女を見た。豐は感謝とも感激ともつかない聲で

「もつと前方へ行かう。此處だと見つけられるといけないから——。」

と手をとるやうに急がせると、お春は彼の耳にまできこえるやうに烈しく手や足を震はせて

「わたし、足が固くなつて歩けませんわ。」

と言つて依然と凝り固まつてゐた。

「固くなつたつてどうしたんだ。そつと歩いてごらん。」

といふと、足のさきに重い分銅でも食つつけられたやうな足どりだ。彼はそつと彼女を押すやうにして

「落ちついて踏み締めるやうに歩いてごらん。大丈夫だよ。」

と囁くやうな低い聲で、あたりに氣を配りながら云ふと、やつと少し落ちついたらしいお春はそつと歩き出した。

「わたし、恐くて恐くて……。」

と、やつと言ふやうに嗄れた宙宇に引つかかつたやうな聲で言つた。あまりに

烈しく震へを帶びた聲であつた。

「恐がらないで、ぢつとして歩くと震へが止まるんです。しつかりして。」

彼自身にも、あまり彼女の摺え上つたやうな、身もそらな調子を見ると、わけなく彼女が處女であり而して彼の凡てであることを感じた。同時にいつの間にか彼の手や膝頭が夥しく震ひ出したことを感じ出した。それを彼女に知らすまいとしながらも、なほ次から次へと續いて新しい顫ひが湧くやうにして來た。

「わたし今夜うちへ歸つたらどう言つたらいいでせう。ほんとに此廢ことがお母さんに知れたらわたし死んでしまはなければなりませんわ。」

と、夢のやうにお春は言つて、彼の手に堅くつかまつた。

「途中ではぐれたつて言へば大丈夫だよ。」と安心させるやうに言つて「今日、お母さんがもう僕に來ちやいけないつて言つてゐたのは、何か譯があるのかね。」

と問ふと、お春は濟まないやうな顏をして

—蝙　蝙—

「此間ね。あなたがわたしを待つていらしつたのを見たんですて。それから彼麼ことを言つたんでせう。だいぶ最う知つてゐるらしいわ。」

とお春はいくらか落ちついたやうな聲で言つた。

「困つたな。お母さんに知れると……」

と言ふとお春はすぐ

「でも貴方さへいらつしやらなければ、何んでもなく思ひますわ。」

「ちや、あんまり行かないやうにしやう。」

と言つたものの、何故だかかうお春が言つて自分から遠のくやうに思はれてしかたがなかつた。豐はすぐ金緣眼鏡のことを考へ出して

「あの男は株主なのかね。」

と問ふと「ええ。」とこたへた。

「いつでもドアのところで巫山戯てゐるぢやないか。女給らと……。」

と言ふとお春は何氣なく

「え。隨分面白いことを仰有るのよ。みんな可笑がるんですもの。」

と、すこし輕口で言つたのが、妙にあの男を眞から可笑しがつてゐるやうで、それが彼女にいくらかの好意をもたせてゐるやうで不愉快な氣がした。

「でも、いやに氣障な奴ぢやないか。春さんはあんな人が好きなんだね。」

と言ふと

「そんなことはないわ。でも、人のいい人なんですもの。」

と言つて、氣のついたやうに今度は調子を變へて

「けれどもわたし餘りあの方とお話しませんの。」

と附け加へた。

—蝙　蝙—

その氣のつきかたが彼にははつきりと判つたので不愉快が增して來て、もう何んにも話する氣がなくなつて默り込んでしまつた。この女には何を言つても通じかねるものがあるやうな、たよりない心もちになつて、お春とはすこし離れて歩いた。その急に默り込んでゐる豊をお春は例の鈍い神經からやつと讀み分けたやうに、おづおづと口を切つた。

「ほんとに何んでもないんですの。あの方はいつも事務所にいらつしやいますし話する機會が餘計ないんですもの。」

と辯解するやうに言つたが、益益、彼女が何かの意味で彼から言ひ寄られたことでもあるやうな氣がし出した。ことに色魔に近い評判のあることなどを考へ合せると、豊はこの女が何か一つのことを隱してゐるやうで、それを言はない間は話をする氣にならなかつた。

お春も默り込んでしまつた。夜は間もなく十一時近かつたが、ちらほらと淺草かへりの人が通るだけで寂然としてゐた。彼はその靜まりかへつた四邊にこぼこぼいふ溝水の落ちる音を暗い人家の裏あたりからしてくるのを聞きながら、突然引裂けたやうな或る想念があたまを刺し貫いた。さうして

「春さんはあの男と關係があるのぢやないか。」

と、何か自分の外から言つてくれたものがゐるやうな氣で、かう彼は言ふと、もう彼女と金縁眼鏡との間に、必ず行はれたと想像される忌はしい惱ましい姿を目に描いた。そして此場合、お春が彼との關係があつた方がいいといふ氣さへし出した。いつそ、さうなれば、女を此處へ騙ばして宿へ歸つて終はうといふ下心さへ浮んで、是が非でも彼女と彼との間に關係があつたやうに想はねばならないやうな、呪はれたやうな自棄な氣もちになつた。さうなれば彼はこの一切から離

れるのだとも思へた。

けれども、こんどは彼女からは返辭がなかつた。默つてうつむいて歩いてゐるお春は、すこしもその頭をあげずに、ぢつと自分の白い足袋でも見つめてゐるやうにして、しつこく默まりをつづけた。其量からいへば多すぎる髪がすぐ豐の目の前に、まるで煙つてでもゐるやうにふさふさと、たつぷりとふくれあがつて彼の視野をさへぎつた。女の髪が何處か憂鬱に見えるやうに殊にこの夜のお春は、ほとんど總ての憂はしい心もちを多すぎる髪の上に漂はしてゐた。

「あるとか、ないとか言つてくれゝばいいんだ。言つてごらん。」

と言つたとき、彼女はしづかに顔をあげた。その顔は濡れてゐた。さうして、はつきりした透明な聲で、

「わたし、そんなことは知りません。」

と言つた。さうして「もう歸して下さい。」とも言つた。彼はすぐに

「ぢやお歸り。さようなら。」

と言ひ棄てるやうに彼は一歩さきにあるき出した。反對の方へ。——すると、お春もゆるゆるながら今來た道へ歸りかけた。(何か知ら一種の……一種の關係があるのだ。それが殆ど突然に行はれたものであるか、またお春が承諾を與へないうちに行はれたものであるかが分らないが、やはり何かしら行はれてゐたのだ。これは不思議な靈的な或る感覺が、然う彼に考へさせて來てならないのだ。特に惡くも善くも言はない彼の男のことに就いて、初めてお春が、今夜のやうな性格的な言葉や、また何時になく一人で歸つて行つたのだ。關係のないものとすれば彼女は、もつと言ひ廻しが、拙くとも、何かしら靈的に爽然とした考へを自分にもたせてくるのだ。清淨な氣をおこさせるのだ。)と豐は考へ出した。(だが自分は嫉妬に燃えてゐる。さうして不幸な出來事が必然さうあるやうにさへ慘酷に想像してゐる。その想像が必らず生きることを祈りさへしてゐる。これか嫉妬でなけ

れば何者だ。)と彼は思ひながら(もし嫉妬のみによつて自分が弱い彼女をああまでいぢめぬいたとすれば)と考へると、もう一度彼女と話したい氣がし出した。そのとき、彼女はだいぶ離れた一つの陰氣なうしろ姿を恰もしよんぼりと暗みがかつた街路の、すつかり行き亘らない瓦斯燈の薄い光の下をあるいてゐた。その寂しい姿のなかに色色な眞實なものが、暖く呼吸してゐるやうに思はれてしかたがなかつた。(あの館内での、私の知ることのできない時間がある。その上、機會がある。ことに彼は公園からすぐ近い大きな旅館の若い主人だ。そこへ館の用事とか何とか言つて呼びよせれば、きつと人のよい女だけに正直に行くに決つてゐる。そんなときは館がはねた後か、でなければ、しづかな午後だ。どちらにしても旅館などの女中をうまく抱き込んで、お春をどうしようが勝手に出來るのだ。)と、彼はまた考へ沈んだ。たしかに彼女はまだ處女だつたのだ。それが然うでないとすれば彼にやられたのだ。とも思ひながら、暗い通りを電車道へいそいだ。

豐はお春から聞いたおしげさんの開いてゐるといふ西洋料理店をすぐ公園裏にたづねた。いつも東京館の特等席の壁の方にぴつたりと食附いてゐるやうに坐つてゐた若い男は、間もなく女給のおしげさんを貰つて、店の帳場に坐つてゐた。おしげさんは卓を蝶蝶のやうに歩き廻りながら客に愛想の宜い微笑をもらしてゐた。

彼が這入つてゆくと、すぐ、おしげさんは傍へやつて來た。さうして

「よく、おいで下さいましたわね。春子さんとお會ひになりまして——活動のお歸りですか。」

と言つて例の人なつこい目でにつとした。

「たいへん變つたことを始めたんですね。それに、お目出度いことがあつたんです

てね。」

といふと、さう問はれるのがおしげさんには嬉しいらしく、漲れるやうに微笑つて

「ありがたうございます。おかげさまで一緒になりましてね。」

と言つて、テエブルを拭いたりした。帳場の方に坐つてゐた若い主人が、彼の方へ向いて

「どうか御贔屓におねがひします。それから御一緒にいらしつて下さい。」

と、明るい顔でいふと、おしげさんまでが

「ほんとに御一緒にね。」

と言はれると、此間の晩からもう四五日も會はないで居たので、どう言つていいか苦笑しながら、それでも豊は快活さうに

「え、そのうちにやつてきますよ。特別にどうか御馳走して下さい。」

といふと、おしげさんが

「いたしますとも。」

と言つてコック場へ彼の註文を通じに行つた。かうして白いエプロンを新しく胸高に結んで、からだに羽根でも生えてゐるやうな敏捷な働き振りが、豊には生活の喜びとか、結婚者のいさぎよい幸福などを沁沁かんじさせた。殊に、女給としての彼女は人の妻君としても矢張り快活できびきびしてゐた。唯、なんとなく、その眼は輝きながらも其底の方にどんよりした深い疲れが漂つてゐるのが、さきの日のおしげさんとは違つたところがあつた。

二三品の洋食を運んで來たあとで、おしげさんは椅子に腰をおろして

「春子さんとはちいちやい時からのお友達なんですてね。わたしなんぞは子供のときからのお友達なんてものは一人も東京にないんで羨ましうございますわ。」

と言つて酒をついだ。さうして再た

「此頃お逢ひになりまして？」

と、ぢつと目をするて、彼の目から何かを讀みわけるやうに微笑つて見せた。彼は急に誘はれ出されたやうな寂しい氣がして

「四五日會ひませんよ。いそがしいものですから。」

と柄にもなく言つた。

「ほんとに温和しい方ですね。あんな方は珍らしいんですよ。（と言つて小さい聲で。お逢ひになるならわたしんところの二階が空いてゐますから御遠慮なくね。何だか自分ばかり仕合せなやうな氣がしてなりませんのよ。」

と心から幸福さうな、それゆゑに人に好意を示さなければならないやうな、しんみりした聲で言つた。

豊もかう温かく外部から抱かれたやうな心もちになつて

「そんなことがありましたら、お願ひします。」

と言つて、豊はふと株主の金縁眼鏡のことを話し出すと

「あの方はそりやいけないんですわ。でも春子さんは大丈夫ですわ。けれども、あの方はもう幾人も女給に手をつけていらしやるのよ。それにね。あなたの前ですが春子さんを好きらしいのですわ。」

と言つて、すぐ目に昂奮の色を浮べて細めるやうにしながら言つた。豊はぎつくりした。いろいろな惱ましい豫期がだんだん彼を不幸な想念に陷し入れてゆくやうな氣になつて

「妻君がないんですか。」

「え。幾度も變つたらしいんですよ。それにあの方のうちは紊れてゐて、そりや大變なんですて。だから、あの方が居らつしやるばかりで隨分お嫁に行つて出される女給の方があるんです。そんな人は、ないがい彼の方の手がついてゐるのが多いんですよ。」

と言ふ下から、豊はもう春子が、その肉體的に決して處女ではないやうな氣がし出した。

「ぢや、あの男が別に春子にどうかしたつて噂を聞きませんか。どうか遠慮なく言つて下さい。後生ですから。」

彼は彼女が話し出す言葉を恐ろしがりながら、ぢつと目を据ゑて聞いた。彼女の言葉一つがすつかり自分とお春との間を決定するもののやうに——。

「噂つてものは信じられないものですけれども、春子さんがお湯を貰ひに行つたつて話をきいたことがありますの。旅館なものですからお湯が立ちませう。それを何時も女給にも入れさせてくれるんですの。でも、そのお湯がね。女にとつては恐ろしいんですて。」

「お湯だけでは何んでもないぢやありませんか。」

と言ふと

「つまりお湯へたびたび入りにゆくと、そのうちに奥の手が出るんですて。春子さんもそこへいらつしつたことがあるんですつて。」

と聞いてゐるうちに、豊はすぐに何も彼も解つたやうな氣がしだした。彼の目には、すぐいまはしい或る聯想が、裸體になつた美しい肉體の上に一疋の蠅が止つたやうに、はつきりと黒ずんだ斑點が浮んだ。ぐらぐらした煮えくりかへつたやうなものが、彼の心臓のところに湧き出した。——おしげさんは又言葉をついで

「でね。はじめは二三人づゝ連れになつて行つたあとで、春子さんが一人で行つたことがあつたさうですて……。」

と言つて、彼の顔を見て急に氣がついたらしく、いそいで言葉を呑み込むやう

にした。

「ぢや、もう、すつかり評判になつてゐるんですか。」

と問ふと

「いいえ、わたしだちで然う言つてゐるかたがあるだけなんですの。でも、矢張御一緒におなんなさるとようございますわ。間違ひのないうちに。」

と氣休めらしく言つて、コック室へ立つて行つた。

豐は目を閉ぢるやうにすると、ぼんやりした氣のよいお春が、發育しきつたとはいへ、どこか熟れきらない果物のやうな幼ない新しさで、ぽうとした湯氣のなかにその白い肉體を現してゐるのを想像すると、すぐに、その肉體が急に勢ひづいた櫻色を染めこんだりするのを惱ましく考へ込んだ。そのすぐ横に色の淺黑い太い金緣眼鏡をかけた例の男の顏があらはれた。——と豐はそのとき、烈しい嫉妬よりももつと慘酷な性慾をかんじはじめた。眼ばかりがいきつきて、それが霞

のやうに瞳の上におほひかぶさつてきて仕方がなかつた。今は嫉妬よりも性慾が激しく彼をゆすぶつてくるのだ。(然うだ。いま初めて私は彼女に性慾を感じたのだ。これまでにないほど劇しく其肉體の匂ひが私に迫つてくるのだ。)と、彼はひとりで、あるだけの酒を飲んで、つぎを言ふと、おしげさんが驚いて

「そんなに御酒がいけるんでしたか。」

「少しはいけるんです。でも酒でも飲まなければやりきれませんからね。」

と言ふと、その言葉のなかに荒い素のままな聲音を少しおしげさんは不安さうに聞いたらしく、しばらくして帳場の方へ行つた。

間もなくふらふらして通りへ出ると、もうどの活動館もハネたらしく、みな一樣に裝飾電燈が消されてしまつて、どのの入口の扉も閉まつてゐた。晝間の賑やかさにくらべて、殆んど別な田舍芝居の小屋がけの前を素通りにしたやうな寂しさ靜かさが、そこらの散らかつた紙屑をこそこそ吹き動かす春の夜の微風とともに

彼の目にうつつて來た。幾十度となくこの館前の通をあるいてゐて、つひぞ聞いたことのない自分の下駄の音までが、乾き切つたやうな高い兩側の建物にひびいてからから鳴るのも、しんとした四邊にひきくらべて寂しかつた。彼はぢつと東京館の前へくると、何かしら、まだお春だけが、どうした間違ひであるか、二階の女給溜りの椅子にしよんぼりと坐つてゐるやうな氣がして爲樣がなかつた。多すぎるほどの束髪を亂らして、何か考へ込んでゐるやうな姿が、目にうつつてくるのであつた。

彼はまた、何か特別な、異樣な祕密を包んでゐるやうな館の內部が、夜とともに濕つぽく冷たくなり切つて、ひるまの、いろいろな看客の空想や嘆息や、それらの緻密な想念に一種の魂といふやうなものが宿つて、いまこの世界の靜まり切つたなかで、主として人間の運命といふべきもの、また不平や境遇や嗟嘆などが殆ど自分等に想像もされない或る靈的な空氣の作用によつて、いともしめやかに

取り交はされてゐるやうな心もちにもなるのであつた。

必らず此世界にあり得べき諸諸のたましひある言葉と言葉とが、生きて一種の働きを交はしてゐるやうにも思はれた。彼は蒼ざめた、どうにもならない足どりを公園から馬道の通りへむけた。いくら落ちついても、どんよりと溝汁のやうに累り溜つたやうな重い心もちが、彼の性慾を次第に重く厚く濁らして行くのだつた。（お春が處女でないといふことを決定することはできないけれど、それが明らかに汚されたとすれば）……と幾度となく考へるたびごとに、不思議にお春を責め苛なむ感情よりも、寧ろ、不思議に自分自らの性慾があふり立てられるだけなのを彼は自分の生活の放縱に原因したことと考へながら、ふらふらした足つきで、だんだん道をいそいだ。その道のつきたところに彼の性慾を鎭める巷があるやうに

——編——

「はい、はい、あら、あら、あら。」

と目まぐるしく走る人力車のうへに、首ばかりふらふらする酔ひどれが、やはり彼と同じい方向へ車をはしらせてゐた。その蒼ざめたやうな顔が酔つてゐるに拘らず、どれを眺めても寂しくゆがんで、何か深い思慮を自分の心にさぐりあてるやうなところがあつた。それがみな一様にはつきりと表れてゐるのだ。豐もいま彼奴らとおなじい、何かしら不快な、後悔を豫期するやうな切ない心もとない足どりで、蒼い額にありありと町の灯をうつしながら、そこから次第に離れてゆくのだ。

「は、は、は、あら、あら、あら。」

といふこの界隈にかぎる車屋さんの懸聲が、わざとらしく氣せはしく、足をとんとん踏みながらも一向に捗取らない曳きやうを續けてゐた。——そのとき、しつこく、彼のあとから尾いてくる一人の老いた車夫があつた。としの頃は六十に

近いであらう。その額にも、喉すぢにも、また、轅棒を握つた澁紙のやうな手つきにも、龜の甲羅を見たときに起る固苦しい皺だらけな、もみくちやな筋ばつた顔をも眺めた。それは疲れ果てた濫費しすぎた餘生を、ただ、せん方なく驅り立ててゐるに過ぎない老いた車夫であつた。

「では、やれ。」

と簡單にかう言つて、古びたガタガタな車に乘つた。車はそろそろと走つた。向ふから來る車とすれちがふとき、この老車夫は、こつそりと溝際の方へよつて若いものを通りすごさせた。その謙讓な、どこかじめじめした物腰は車上の豐を寂しがらせた。

街はすこしづつ青い芽立ちをその家家のまわりに着けはじめたころまで、彼は根氣よく毎晩お春を尾けたが、大概の晩は母親と一緒に歸つた。早く引いた晩が二日、そのあとはみんな見え隱れに彼は尾いてあるいた。唯、それは跡をつける

——編——

といふことが、彼にとつてかなりな快樂であつたし、また、どうしても然うしないと睡れないやうなことがあつたからである。彼はまるで活動館と館との通りぬけの埃深いゴミクタの中や、上野までの近道からすぐ入谷にゆける暗い通り、そこにある軒低い古着屋のわきの小路、または毎晩のやうに新しい群衆によつて充たされる大通りなどに、いつも蝙蝠のやうに彼方ゆき此處ゆきしたりしてゐた。目まぐるしい人通りのなかを何時も彼女を逐ふやうにしてあるくうち、自分と同じいやうに、やはり女給などを尾け廻してゐるらしい不良少年の群を、彼は彼のうしろ暗い感覺によつて、すぐに見分けることができてきた。それは、うそうそと絶え間なく人波の間をくぐつたり、急に小路や軒下に佇んだりしながら、目ばかり烈しく光らせてゐて、少しも落ちついたところがない點など、よく見きわめることが出來るのであつた。しかも、絶えず對手の顏ばかり搜してゐるために、目はめつたに、地べたを見るといふことがなく、いつも、宙宇に浮ぶやうに人波の

頭越しを見つめてばかり居た。どこかひよろひよろと薄暗く、極めて目立たないやうにしてゐても、時とすると、その目的が正しいものでないことが、落ちつかない全體の調子から窺はれるのであつた。例へば、目的の容貌をあれやこれやと目で探つてゐるうち、ひよいとした途端から、よその人の眼にじろりと目を停まらせることが、その佇んでゐる恰好からも夫れと判るのであつた。

彼自らは宛然で一つの火の玉のやうに、お春のあとを追つてゐたため、しまひにお春さへ、何かしら恐恐と彼をふりかへつて見ることがあつた。あんなに仕なくともいいのにといふ考へと、また、よその人から(殊に母親から)彼がつけてゐると云ふことを知られると惡いといふ心配のために、あきらかに彼女が彼のさうした疑ひ深い執念の魂のやうな、蒼褪めた顏を見るとき、だんだんに怖氣がつい

たらしかつたのである。それは聽て自分にも次第に迫つてくるやうな危險と、何かしら自分を飽迄恐がらせることによつてのみ彼が存在してゐるやうに、それが決して之までのやうな、優しい愛撫が加はつてゐないやうに思はれるので、よくお春は母親の袂のかげに隱れるやうに、つとめて早足で、すこしも早く豐の視界から遁れたいやうにも彼から見えたのであつた。豐はただ、暫らくでも彼女一人ぎりと話したかつたし、また、すこしでも隙があつたら二人きりになりたかつたのである。それに、彼はお春の家へは、いつか斷られてから訪ねることができなかつた故もあるのだ。

所がその晩、彼はいつものやうにお春のかへりを待つてゐたときに、ちやうど母親が迎へに來ないらしく、お春ひとりが館から出てくるのを見た。いつものやうに小さい風呂敷包を手にもつて、ちよつと、あとさきを振かへつて、突然に反對の公園の方へ歩いて行つたので、豐は驚いて、あとをつけた。すぐ追ひついて

話をしやうと思つてゐたが、今夜に限つて別な道を行くのは何か理由があるらしく思はれた。仲店の方への賑やかな通りへゆかないで、不意に旅館の多い通りへ出たとき、彼はお春が株主の家へゆくことにすぐさま氣がついて、息が詰るやうな烈しい鼓動を感じ出した。金緣眼鏡の計營してゐる旅館の前にゆくとお春はまたあとさきを振かへつて誰も見てゐないのを見澄して入つて行つた。

彼は釘づけにされたやうに立ち竦んで、その旅館の入口を見ると、若い女中達が店の間にあつまつて何か饒舌つてゐる外にお春らしい姿もなかつた。夜おそくああしてお春がたづねてゆくからは、もう彼のお春ではない。

「唯一つのことが私にはできなかつたからだ。私はそれを求めやうとして出來なかつたからだ。」

と思ひながら、その二階の白い障子のひつたり閉められたのや、入口からすぐに上ることのできる階段を恨めしく見あげた。心は水のやうに澄みきつて、ちか

らが身體から拔け出てしまつたやうに、がつかりしてしまつた。

彼はとぼとぼと歩き出した。

彼の目の前にしづかな海岸の、さらさら寄せる渚が描かれた。そこを歩いてゐる自分の姿と小さな女の子とを描いた。あの女の子がこのお春であらうとは、彼自らにとつてさへ不思議な運命であつた。

その翌晩、彼はまた東京館の椅子の上に坐りながら、多くはお春に目をつけてゐた。彼のしつこい熟視は、いつもドアのところにゐるお春を怖氣させたのか、ときどき、彼の方を見ぬふりをしながら冷たい偸み見をつづけながらゐた。豐は合圖になつてゐる燐寸を摺つて煙草をふかしたりしたが、彼女は見ぬふりをしながら、めつたに、いつものやうに彼とすれちがひになることなどがなかつた。しかし彼はしつこく、彼女が自分の椅子の傍からすりぬけてゆくべきこととさうして自分が手紙を渡したいと云ふことを目でいろいろ暗示をしたけれど、お春はい

い加減に眼をそらしてしまつて、彼の切ない喘ぐやうな心もちが通じないらしかつた。

豐はだんだん深い怒りが折り重なつて、もうお春といふものの存在が、決して自分にとつて優美なものでないことを感じ初めた。ぷつつり切れた二人の心もちが、ざらざらしたやうな冷たい彼女の瞳にもあらはれた。豐は自分の心が尖つてゆき、荒れひびれてゆくことを感じ出した。——さうして、なほ執拗に彼はお春にもう一度だけ自分の傍を行つてくれるやうに暗示をした。さうした永い時間がたつたとき、やつとお春は彼のそばへ來るやうに歩いて來た。其眼は物憂げに映畫に向けられたまま、豐といふものを認めてゐないやうに、曾つてない冷たい落着きと、づるさうな荒荒しいやうな身體の動きやうを示しながらやつて來た。彼れ

はそれを見たとき、破裂したやうな激しい怒りが逆に上つてくることを感じた。もう此女とも別れるのだ。此女に永い間自分の心を欺かれてゐたのだ。毎晩のやうにのら犬のやうに街頭にさまよはしたのは誰だつたかと、彼はぐらぐらする目でお春を凝視めた。お春は近づいた。豐の手のところへお春はいつものやうに手紙を受取らうとして、彼の掌の上にその手をのせたとき、彼は逆に彼女につめたい金屬をにぎらせた。お春は小さい叫をほんの一瞬間にあげながら、いきなり慌てて手を引いた。そのとき、鋭利な金屬の刄がしらが、お春の小指をすうと切つて、再び豐の手のなかにナイフはかくされた。

豐は慘酷にちかい胴震ひと、呼吸窒るはげしい心臓の高い鼓動とを同時にからだにかんじながら、からだを石のやうに凝り固らして椅子にもたれた。お春は廊下へ出ると、すぐにばたばたと敷物の上を馳け出してゆくらしい足音がした。彼はお春がきつと館の事務所へこの事を告げに行くかといふことや、にはかに自分

が事務所の人人から引摺り出されることを想像しながら、ぢつと動かなかつた。彼はお春が近づいてきた瞬間、彼女を永く苦しめたいといふ憎念にかられてゐるとき、袂囊とともに握りしめたのは古い一つの金屬であつた。それが、初めお春が來たら、わたさうと思つてゐた手紙を遣る氣にならないほど、怒りに燃えてゐたのであつた。

——そのとき、うしろにどやどやと人の足音がしたので、彼はもしやと思ひながら脊中に寒氣をもよほしながら振かへると、それは二三人づれの看客であつたので、ほつとして、ふと足もとを凝然と見つめた。切つたことはたしかだ。小指の腹から掌へかけて慥に手ごたへがあつたのだ。もしやと思ひながら敷物の上を見つめたけれど、それらしい跡がなかつた。それから彼は煙草を飲むやうにして燐寸を擦つて見たけれど、血らしいものがなかつた。

暫らくしてから、彼は落ちつかないので歸らうと廊下づたひに下足の方へ行く

と、お春と他の女給と何か立ち話をしてゐたが、お春は彼の姿を見るとすぐに逃げるやうに、その女給と特等席のうしろへ行つた。その眼は恐怖と小さい怒りとに震へてゐた。その左の手は白い繃帶が施されてゐるのも、いちはやく彼は目にとめながら、深い怨恨に燃えるやうな目つきで見つめながら階段を下りた。そとへ飛び出すと、館と館のあひだから春の夜らしいぼんやりした月が出てゐた。黄ろい濁つたやうなどろどろの月であつた。

豐は晩方になると下宿にゐても、朦朧とした煙のやうな巷の餘映が目にうかんでくるばかりでなく、絶え間なく、青い人影のゆききする夢におびやかされて、いつの間にかふらふらと犬のやうに宿を這ひ出るのが常であつた。上野から車坂への踏切りの陸橋、それから公園への汚ない緣日商人のならんでゐる通りの、カンテラに蒸されて烟りぼくなつてゐる町をぼんやりと腐拔けのやうになつて歩いてゆくのであつた。それは殆どひとりでに、そこを行かなければならないもののやうに、からだの節節のゆるんだやうな疲れた歩きぶりを續けるのであつた。

そして館街の烈しい通りへ出ると、しらず知らず人波にもまれながら、日本館のあたりまでゆくと、こんどは又ひとりでに池のそばまで波のやうに揉まれてゆき、それから又人と人との間に織られながら、ぼんやりと日本館の前あたりまで流されるのであつた。さうしてゐるうちにも、館ごとに呼び立てる小者や切符場の女などがいつの間にか自分ばかりを見咎めてゐるやうな氣がして、急にまた人波のあひだに隱れたりするのである。唯譯もなくふらふらした頭は、東京館の前に來ると、森として四邊とは別な靜かさにかへつて、その階上の、ちやうど彼女等の群れてゐる窓さきを眺めるのであつたが、そのたびにその窓から突然にお春が見下ろしはしないだらうかといふ小さい懸念に胸をどきつかせるのであつた。

ときには殆ど機械的に切符を買つてしまふことなどがあつた。登りなれた階段ではあつたが、ラセラン階段の曲り目ごとにお春が上の方に立つてゐはしないかと、それを見極めた上でなければ登れなかつたのである。

その日も姿は見えなかつた。非番であるまいかと思ひながらも、豐は幾度となくドアの方を振りかへつた。不思議なことには、何時の間にか女給仲間のうちに新しい顔がまじつてゐるのも氣になり出した。それは、どういふものであるか、來る女給もみな二三ヶ月の間に姿を消して、たえず新しい年頃の女が、つぎから次へと代ることも、淺草界隈の移り變りの烈しいことを表はしてゐるやうであつた。

豐はドアの方を振りかへるごとに、その窓ぎはに何時もまるまると肥えたからだが浮いて見え、それが時々、こちらの方を振りかへるやうな氣がして仕方がなかつた。その顔はいつも無邪氣なままで踏つぶされてゐるやうな、苛苛した氣持

をおこさせてくるのであつた。不思議に歎り泣いてゐるやうにも見え、その眉や眼や鼻が蝸牛を踏みつぶしたやうに、じくじくに濕つて、自分の方を見つめてゐるやうであつた。

「俺は彼の女の手の平をざつくりと遣つたが、しかし俺は何故もつと殘忍に最つと酷く遣つけられなかつたのだらう。」と彼は考へ出した。しかもあの時はただ偶然にやつただけだ。平生の憎悪が一時に不意に出てきたのだ。あの時お春が大聲を立てたとしたら、或ひは突然に俺はお春に斬つてかかつたかも知れない。そして俺はあの時からどうなつたかも解らないのだ。さう考へると彼は何かうしろにざらざらした寒さと、その上、この館の小者どもが背後に立つてゐるやうな氣がして、急にふりかへると、誰も立つてゐなかつた。

間もなく彼は廊下へ出ると、階段のところで古くからゐる中年の女給に會つたので、思はず呼び止めた。そして

「お春といふのはもう館には居ないのですか。」とさう言つた。なるべく叮嚀に低い聲で……女はふしぎさうに彼の顔をじろじろ見つめたが、

「あの方は今日から階下の方へいらしつたんですよ。」

さう言つてまたじろじろ見つめた。そして直ぐ

「御用ならば呼んでおあげしませうか。すぐ階下なんですから。」

と、平常懇意らしかつたと見えて親切に言つたが、彼はあはてて

「いや何でもないんです。階下で會ひますから。お手を止めてすみません。」と彼はまた叮嚀にいふと、女は「どうしまして——。」と言つて、曲り角でまた不意にふりかへつて鳥渡こちらを見て去つた。

「すると、あれから後に二階にゐると危ないと思つて階下へ行つたんだ。」と考へ出すと、彼は突然に執拗な蛇のやうなねばねばした怨恨と殘忍と、それに烈しい憎惡とが、ぞくぞくとからだを襲うてくることを感じた。

「俺を苦しめたやうに彼の女も苦しめてやる。俺はそれより外に今何も考へることができないのだ。」

と、下足を受取ると、また、ほつかりと騷騷しい通りへ出たのである。

日はもう暮れかかつて、人垣で一杯になつた通りは煙草と埃と、だんだん藍いろに染つた空氣を黑黑とした群衆のあたまが陰をつくりはじめてゐて、館と館とに劃られた四角な空だけがやや明るくなつてゐるばかりであつた。それに池の方からひろがつてきた靄めいたうつすりした冷たさが、なほ、そこら一面をうすぐらくしてゐた。

豊はそこにぼんやり立つてゐたが、突然に切符場へ行つて三等の札を買ふと、重い垢じみたカーテンのどつしりと下ろされた土間から、なるべく壁にそふた人

と人との暗く陰つたところに隠れた。さうしてゐるうちに、だんだんに内部の暗い空氣に慣れるに決つてゐると考へたからで、迂濶に、そこらに棒立ちになつてゐると、すぐお春に見つかるし、逃げ出すに決つてゐると思つたからであつた。

その内段段前に立つてゐる人人の頭や肩が見えはじめ、そこにある丸太の柵までがはつきり見え出したころに、豊はあちこちを見つめ出したとき、驚いたことには、すぐ彼の立つてゐる壁にそふた重いカーテンをうしろにして、ぼんやり立つてゐるお春を見出したのであつた。わづか一週間の間に、女の顔が何の部分といふことなしに、それ全體に烈しい變化があるやうな氣がした。たとへば鼻とか頬とかの線が、目に見えないものに嚙り取られたやうな、かすかすになつた味ひのない輪廓を洒してゐることに氣がついたのである。しかもお春の一番落着いて美しく感じられる彼のぼんやりした人の善い表情が、すつかり洗ひ落されたやうになつて、何かかう、顔ぢゆうを撲られたあとのやうな蒼白い苛苛しさへ浮き出

して見えたのであつた。

「かうして見てゐると、たしかにお春は變つてゐる。しかも顔中にあふれた緊張した何も彼も知り盡したやうな目の光はどうであらう。そしてこれまで柔かく立つてゐた姿にひきかへ、これは何といふ堅い感じのする姿勢であらう。」

彼はさう思ひながら、その足もとから、例の多すぎるやうな髪を見た。髪はくらみを含んだ空氣にもつと暗みある艶を出して、カーテンに吊されたやうになつて据ゑられてあつた。

そのときお春は何かのはづみに、ちよいとからだを動かしたときに、ちらと光つたものがあつたので、目をすゑて見ると、例の繻帶をした手が動いたことがわかつたのである。彼はそのほんのりした繻帶の白い木綿地を見てゐるうちに、だんだん心の底から熱いものの逆上つてくることを感じた。同時に何ともいはれぬ耻かしい氣持と、小氣味よい苛苛した快よい感じと、次にくるものは、お春のか

らだにしつかりした傷を負してやつたといふ掻くやうな肉感が、だらだらと飴を嘗めるやうに惱ましく心にまつはりついて來ることであつた。その結べてある繃帶が柔かい木綿地で、一種のへんな藥の匂ひまで嗅がれるやうな氣がしたのであつた。

「俺があそこにへばりついてゐるのだ。俺の執念深い何者かが……肩の凝りのやうなものが疼いて喰付いてゐるのだ。じくじく濕つたやうな傷ぐちの膿がはみ出してゐるやうに、じくじくとおれの何者かがあそこにへばりついてゐるのだ。」彼はさう考へると、うすくらがりの中で、ぱちぱちと撥くやうな凝視を永い間つづけた。そこに惹きずり込まれたやうな氣もちでなく、釘か何かを打ち込むやうに……永く見つめた。

そのときお春はふいと何氣なく彼の方をぼんやりと眺めたが、すこし横向きにじつと凝視めてゐる彼の視線に、はつと思ふ間もなく引つかかつて、さつと顏色

を變へたやうに思はれた。その眼の輪廓が突然に廣がつたと見る間に、小さい唇が何かの叫び聲を含み殺したやうに、ちよいと開いたが直ぐ閉ぢられた。そしてうしろのだらりと垂がつた重い入口のカーテンとカーテンとの絞り目へ、映畫の消え去るやうな烈しい速力で、殆どすべり込むやうに消えて行つたのである。ただそのとき入口の電燈の餘映が三角形に床の上に、カーテンの絞り目の搖れたときにうつつたきりで、音もなく、あとはしんとした肅やかな低い音樂が、恰も海濱の景情をたたへた映畫につれて起つてゐるだけであつた。

しかし豊は目にまつはつてくる繃帶された、生白い手があの咄嗟の間に射込まれてから、そこのカーテンの埃ばんだ暗い色をときどき神經的にふりかへつては眺めたのであつた。

裝飾電燈が午後十時すぎになると、活動館の建物から次第に剝がれてゆき、やつと暗空に寂しく聳立するころまで豐はぼんやり建物と建物との間に佇んでゐた。各館の入口や裏口からぐつたりした女らが、みな仕着せを脱いでもう一度娘に歸つたやうな姿で歸りはじめると、流石に騷騷しい通りも、ぱつたりと音響が絶えてしまつてあちこちの館に重い裏戸を閉める音がするばかりで、そのあとはただ晝夜となく揚げた幟が、生ぬるい晩春の夜かぜにあふられて、はたはたと、鴎の羽音のやうにゆるく、折々屋根や階上に起るばかりであつた。

豐はそこに立止つてから二時間あまり經つたが、當然歸る筈のお春の姿が、その裏口にも見られなかつたばかりでなく、重い土戸はとつくに閉められたきりで、内部はしんとした林のやうな靜けさにかへつてゐた。窓窓は勿論のともはや一人として殘つてゐないらしかつた。彼はそのときお春がいつの間にか遁げ出してしまつたことに氣がつくと、自分がぼんやりと建物の間に狹まれてゐたことをばか

ばかしく感じる半面に、それから續いた憎惡がまた蛇のやうにからみついてきたのである。

「おれはあの女にあつて、もう何もいふことがないのだ。だが、おれは何かがまだあの女のなかにあるやうな氣がする。おれといふものの影や心や氣持がまだ殘つて居はしないかといふことを、おれはおれ自身の蛇のやうな妬みをまだ衝きとめずには居られないのだ。」さう考へると、彼は黑ずんだ顏いちめんに動物的に痺れたやうな苛苛した熱をかんじながら、もと來た車阪への通りを歩いて行つた。

通りは屋臺から蒸せあがる臭氣も次第に冷え、疎らな人通りもうそ寒く、森として下駄の音だけがからから響くだけであつた。例の土橋のきはまでくると、いつもの占師が疎らな人通りにちらちら目を投げながら、七八間さきへ歩いてきた彼をすぐに目にいれた。彼は彼でその凹んで黝ずんだ目と、蒼白く凸起した頰骨や縮毛のながい頭を見かへした。「あいつは何時も俺を見てゐる。俺がこの公園へ

來はじめてから不思議にあいつの顔を見ないことがない。お春と一しよに歩いてゐたときも、あいつが氣味惡くにたりと背後から微笑をかけたことがある。おれは彼奴の顔から離れて、あいつの目を遁れて此の通りを歩いたことがない。往來を見つめてゐる彼奴はほんどおれの顔を毎晩見てゐるにちがひないのだ。」彼はさう考へると、いつ通つても曾つて客のあつたためしのない占師の目つきをびつしやりと叩きつけるやうに睨まへて、足早に通りすぎやうとして、すこし急ぐと、そこにあつた小石に(誰でも急いだときするやうに)衝きあたつて、あやふく轉げやうとしたのであつた。はつとして踏み止まると、その慌てたひらめのやうな手つきをした豊を見ると、かれはその蒼白く瘠せた顔を思はず微笑さした。豊はそのとき、どこか腥ぐさいやうな彼の呼吸をふつと引つかけられたやうにぎつくりしたが、ふしぎなことには、誰でも躓いたときなどに起りやすい自嘲めいた微笑がひとりでに浮んでくるやうに、豊はおもはず苦笑した。占師はいきなり彼の苦

笑のなかへ飛びこんでくるやうに、また微笑つて、その唇をすこし動かした。何か言つたらしかつたが、低く掠れてきこえなかつた。と、またかれはその色のさめた唇をうごかした。

「一つ相を見ませんか。危ないところでした。」

と言つたとき豊は何氣なしにふいと足をとめた。あたりに人氣もなかつた。「おれは足を止めてはいけないのだ。かういふ風來犬に引つかかつてたまるものか。」さう考へるひまに、かれは又こゑをかけた。

「ちよいとお手をお出しください。お手間はとらせませんから、ほんのちよつとの間ですから。」

かう言つたかれは、蒼白く筋ばつた掌をすづと寫本の上にさし出した。よごれた寫本にも幾つとなく掌の繪が描かれてあつて、筋肉線にはみな蟻のやうにむづむづした細字がかかれてあつた。そして差し出した手のかげが寫本の上へは落ち

ないで、笠竹と机かけの白布の上へななめにカンテラの光をうけて映つてゐた。

豐はだまつて佇つたが、二三歩うしろずさりしながら、すぐ歩き出さうとした。が心のうちでは、いつたい此奴は何を言ふのだらう。こいつの寫本や笠竹や蒼白い顔などが、いつたいどれだけおれの身の上などを見極めることができるだらう。さう思つてゐるうちに、足はひとりでにかれの方へ二歩ばかり引もどされた。

が豐はまた二歩ばかり引きさがつたが、ふしぎなことにはかれの目の光が微笑つて、親切さうに彼の視覺にそのときはもうすつかり這入りこんでゐたのであつた。

「ちよいとお手を出しなさい。」

さう彼は言ふと、はつと氣のついたときは、もう豐の手は瘠せた水蟲に食はれ

たやうなかさかさに脂氣のない彼の手にしつかりと掴まれてゐた。手首をおさへておいて、右の手で掌の線をすうと指さきでなでた。そのうへ、彼は掌をたてよこにしらべた。

占師はふしぎに右の手がつめたく、左の方が溫まつてゐて、冷溫いちどきにべつべつな惡寒を例へば股ぐらをくすぐつたときのやうに、豐の全身につたへた。

豐はすこし俯向いてゐたので、後腦のあたりを見つめたなりの高い占師の視線をかんじながら、蝗が這ふやうなむづ痒さをかんじてしかたがなかつた。

「この相によりますと……手の相によるとですね。最近に女難がありましたな。」

さう言つたとき、豐ははじめて冷たい微笑を浮べながら、彼の目を覗きあげた。

さうして又くつりと鼻のさきで笑つた。彼は又つづけた。

「その女にはかかはらない方がいいんですよ。もう餘處に男ができてゐるんだから。それに違ひはないでせう。」

占師はすこし脊伸びをして、惡こすいやうな顔つきをした。豐ははじめて口をきると、占師を喜ばしてやらうといふやうな氣がして、

「その通りですよ。女とわかれて困つてゐるんです。」

と言つて、腹のなかで豐は大聲をあげて、げらげら笑ひ廻つてゐるやうな別な氣狂ひのやうな自分を感じた。

「さうでせう。だが、あなたの手相はこれは大變出世する徵候があるんですよ。お世辭ではない。いや珍らしいほどです。」

さういはれたとき、彼は思はずすつと手をひいた。一枚の紙を剝いだやうに、占師の手はまだ彼の手を握つてゐるやうな執念深い伸び方をして、さむざむと殘つた。

「どうして手をお引きになつたのです。もちよつとの間ですから見せていただきたい。ちよつとでいい。」

と、彼はその掌を豐の前へつき出した。そして彼の目を射りつけるやうに眺めこんでゐたのである。

「いやもう澤山だ。おあしは……。」

豐はさう言つて、ふところへ手を入れて財布をさぐると、ふところにはさつきの活動のプログラムの洋紙ががさがさと硬ばつてゐた。うすぐらい懷中をかれはさぐるやうに見つめてゐたが、

「五錢いただけばいいのです。」

さう言つて柔和さうに豐をながめた。もう五十を過ぎてゐるだらうと、これまでになく彼はこの占師が今柔和な表情になつたことに氣がついた。

「では五錢……。」

さういふと占師はまた優しさうにしげしげと彼をみた。哀れむやうなふしぎな

目つきをした。

彼はあるき出した。

「とうとうあの占師につかまつてしまつた。おれだけはと思ひながらも、あいつは實に不思議な力をもつてゐる。」さう思ひながら土橋をわたると、どこかで半鐘の鳴る音がした。ききすますと遠いらしく二つづ間を置いて鳴つてゐた。

「あいつは俺を永い間見てゐたにちがひない。俺が丱になると運が開くなどといふことを言つたが、……一體、おれにどういふ運があるのだ。」

彼はすこし歩いては考へてゐるうち、右ッ側の軒のくらやみを這ふやうにしてゆく三人づれがあつた。よく見ると豐はびつくりした。それはお春と、その母と辯士の何とかいふ男であつたので、今まで靜まりきつた頭がぐらぐらしてきて、身體の中に山犬が荒出したやうな氣になり出した。それにしても何處から歩いて來たのだらう。本願寺を通り抜けて來たものに違ひないのだ——お春はやはり繃帶

をしてゐて、その手がふらふら動いてゐた。母親と辯士は何か話しながらゐたが、ときどき、お春の笑ひ聲が含みごゑで生生しく、もんどり打つて豐の方にきこえた。笑ひごゑといふものは、ことに異性のそれは不思議に情慾的なものであるが……お春は笑ひごゑは彼の襟首からぞくぞくと這入つてきて、嫉妬めいたかつかつとする熱氣がからだぢゆうにあぶらを塗つたやうにぬるぬると濕めり出した。

女連れは何か話しながら、寢靜まつたあたりを女らしい下駄の音を立てて歩いてゐたが、とある横丁までくると、辯士だけがお春等と離れて、影をひいて別れた。お春のさよならとか何とかいふ聲がした。

豐は暗いところを撰つては、あるひは電柱のかげやポスト、それから軒下を縫つては殆ど機械的に尾けてあるいた。何のために跟けるのか。母親がああして居

れば何もできないのを知つてゐても、彼は絲を吐いた毛蟲のやうに、離れて近づき、そしては暗と暗とを織るやうに歩いてゐた。

車阪のちかくにくると、そこに今店を閉めやうとすると八百屋があつた。そこまでゆくと母親が何か明朝の漬物でも買つてゐるらしく、青菜や玉葱をいちいち値ぶみしてゐるのが見えた。

そのあひだお春は、となりの藥屋の軒下にうすぐらくぼんやりと立つて、通りと八百屋とを交る交るに見てゐた。豐は何氣なくその前を通らうといふ氣がし出した。それは不思議に變にからまつた蛇のやうな執念さと憎しみと、それにも一つは、かういふ夜中にまで跟けてゐるといふことを見るだけでも、何かしら其處に自分の惡どいどす黑くいびつになつた心を曝け出すことで、その上、どれだけでも厭がられるものであるかといふこと、および出來るだけ嫌がられることによつて、ぎちぎちした變な快感を感じながら、苦しさうに鼻のさきでヒン歪つたやうな笑ひ聲を立てたいやうな氣になるのであつた。

二三間手前までくると、お春はまだ氣附かないらしく彼を唯の通行人のやうに眺めてゐたが豐だと感じた瞬間に殆ど卒倒せんばかりに身體ぢゆうをちぢめて驚いたが、その顏はいきなり引き伸したやうに青白くなつて、ちよいと縮みあがつたが、つぎの瞬間にはあやぶく八百屋へ馳け込まうと身構へをするのであつた。そのときは、彼はお春と三尺へだたない溝ぎはに憎惡に引ッ掻かれたやうにつッ立つてゐた。

「どうしてそんなに遁げるんだ。いまおれは別に何もしないから安心するがい い。」と豐は言つて何か考へてゐたことを言はうとしたが、どうも思ひ出せないで一分ばかり立つてゐた。お春は喉のところに呼吸か、詰つたやうにがくがくしてゐたが、やはり何もいはないで棒立ちにつッ立つてゐた。

「何を言つてももう取りかへしがつかないが……おれも惡いが……。」さう言つて

彼は繃帶した手をじろりとながめると、お春も機械的にそれを見た。ただ、あまりの驚きのために射竦められたやうにぶるぶるしてゐたが、しばらくすると、お春の目がさう云つてゐる間に、ふしぎに落着いてじつと彼の目をみつめて、すこしも顏はなくなつてきて、しんとした靜かさをたたへた。

「何とか言はないかね。時間はないが……。」

と、豐は八百屋で風呂敷を包んでゐる母親が、それをくるくると包み終へて、財布に手をかけて金を拂はうとしてゐるのを見つめながら言つたとき、お春もおなじく母親の方をちよいと見た。あたりは靜まりきつてゐた。溝板のしたから何處かの下水を落す音が、ごぼごぼと濁つたやうな音をたてた。それが慌しく騷いでゐる胸のところにひびいて痛いやうな氣がした。

母親は金を拂ふと、ちよいと俯向いて何かを拾つたやうに跼んだが

「どうもお邪魔しました。」と言つて、くるつとからだを動かして通りへ一歩出よ

うとしたとき、お春はひくい聲で、しかも引きずり出された樣に小さく叫んだ。

「家のそばへ來て下さい。」と言つてすぐ馳け出した。豐はそこにあつた看板の暗へするつと隱れた。

「家のそばへ來て下さい。」

と、豐は口のうちでいふと、また見えがくれにあとを跟けた。

「とすると、お春はあとから出て來るのだらうか。しかしこんな夜更けに出て來ることはなからう。」と考へながら暗をよつては歩いた。

お春はときどき振り顧つてこちらを見つめてゐたが、それは蒼白く歪んで見えた。そのたびに豐は自分の姿が黑ずんだ化物のやうに通りや辻辻や軒下にたたずみながら跟けてゆくのを次第に不愉快に感じ出した。おれはしまひにどうなるのだらう。盜人のやうにかうして毎晩のやうに搔き亂されて神經をいらいらと踏みにじつて歩いてゐるのだ。豐がお春の家のそばへ行くと、二人はなかへ這入つた

が、間もなくがつちりと鍵がおろされた。四邊は森として白いむく犬がふらふらとゴミ箱をあさりながら幾つも歩き廻つてゐた。

豐はなるべく音のしないやうに彼處此處を歩いたりして居たが、どれだけ經つてもお春は出てこなかつた。家の内部は森として話しごゑさへもなく、咳一つしなかつた。何處かで時計が一つ鳴つた。と思ふと、どの家からも不思議に一つづつの時計の鈴が、三秒ほどづつ經つては鳴つた。それが人通りの絶えた入谷の寺につづいた長屋中に寂しくひびいたのである。

ひよつとすると、出やうと思つて出られなかつたのかも知れない。又は始めから嘘を吐いたのかも知れない。しかし彼女に咄嗟の間に嘘をつくなどといふほどのゆとりがある筈はないのだ。豐はあと五分十分といふやうに待つてゐたが、夜

冷えにしつとりと身體が濕つて來るばかりで、今はそこにある長屋ぢゆうが黑ずんだ。犬も居ない犬小屋のやうに森として墓地に挾まれて寢靜まつてゐた。彼は變に靜まりきつた頭で、妙に寂しい淺猿しさに取縋られたやうになつて、終ひにぐつたりした疲勞まで感じ出してぼんやりして歸りかかつた。待たなければよかつたとも思ひながら、矢張り一切が終つたのだと、とぼとぼと歩き出した。

膝から下が重くずきずきした空疼きがしてきて、急に歩きにくいやうな氣がした。考へて見ると午後から殆ど歩きつづめに歩き廻つて居るやうなものであつた。夜露で濕つた着物は手のあたりや足もとにへばりつくほど濡れて居た。

「ただおれは餓鬼のやうに自分ばかりを苛めたやうなものだ。おれはそして一つのものも與へられなかつたのだ。」

さう考へると次第に頭がはつきりしてくることを感じた。「ひよつとすると、俺の頭の中には痴呆症の病根があるのに違ひない。おれの從弟らは皆それにやら

れて居る。俺にもその症狀が俺自身の知覺しない瞬間に發作してゐるに相違ない。」と考へながら再た阪本の通りへ出ようと、洗濯屋の角を曲らうとしたとき、其處にあつた洗濯屋の蔭から、すつと一人の鳥打帽をかむつた男が、ほとんど音も立てないで影のやうに彼の目の前に立ち塞がつた。そして直ぐに堅い感じのする言葉が、彼の何者であるかを夜遊びに慣れた豐に直覺させたのである。

「君は何處へ行つて來たのだ。そして何處へ歸るのだ。」

さう言はれたとき、豐は何等の用意なく答へた。

「淺草から知合ひを廻つて歸つてきたところです。宿は谷中です。」

豐は平凡にさう言つて鳥打帽のしたから覗いてゐる小怜悧で、それが夜ばかりしか働けないものの目つきを持つてゐることを感じながら、そつと見上げた。

「では失禮ですが……ちよいと懷中を調べたいんですが……。」

彼はさう言つて、豐の承諾を待つてふところを査べた。そこには鰐口と手帳と

しか這入つてゐなかつたのである。

「どうも失禮しました。」さう言つて、彼は豐を大通りの方へ送り出した。そのとき恰も豐が何等かの、何かを意味する犯人のやうな複雜な氣もちと、それを逃れ得たときの小氣味よいそはそはした輕い快感とを感じたのであつた。

根岸から御隱殿の踏切で、彼はまた先刻調べられたと同樣な黑い影につきまとはれ、さうして同樣な質問に會つたのである。

「何處から。」

「淺草からです。」と答へて終ふと、その影はすぐに又公園の暗い通りへ彼をつき放すやうにした。

暗い通りでは下駄の音が後からも前からもして來るやうに響いた。動物園では夜啼の烈しい豹が、すつかり若葉を着き揃へた櫻の並木を震はせながら、びやうびやうと高く頻に吼え猛つてゐた。

公園のはづれで彼はまたつかまへられた。そして同樣な問ひをあたへられた。

彼はそのとき

「これで三度目です。」さう言つて質問の要點をこちらから喋舌り出した。あまり氣を利かしすぎたので、その黑い影はにたりと微笑つて

「いや分りました。どうぞ入らしつて下さい。」

と言つて置いて二三步踏み出したとき「ちよいとお待ちなすつて。」と言つて、袂のあたりを握つてみてしらべた。懷中も。そして其男はかういふ職業にのみ見られる卑しい日燒けのした微笑を浮べて、豐を又つき放すやうにした。どこかで二時が鳴つた。夜はうそ寒くどんよりと曇りを帶びてゐた。

その翌朝から豐は一週間ばかりうとうとして、膝から下が疼き通しで、夜は不

眠で晝間は懶く熱を身體の至る所に感じてゐた。やつと起きると、誰でも病氣したものが起きあがると感じるやうに、季節は何時の間にか激しい夏に向つて、樹樹は矢のやうな綠をもつて街街を縱橫に靑く染め上げてゐた。彼は幽靈のやうに細れてゐたばかりでなく、一見、蛙の日干しのやうに、身體中がしなび込んでひよろひよろしてゐた。床の中にゐても每日のやうに混鬧の巷が目にうつつて、そこへ行きさへすれば、自分のしぶとい殘忍な對象を見ることができ、そのものに直接迫害をせずに、精神的に彼の女がどうにもならないやうな亡靈に憑かれたやうな苦しみに陷し入れたいと日夜、頭がぐらぐらと煮え立るのであつた。それはどういふ人人にもある殘忍性であるとはいへ、豐は自分の容貌を鏡で見るときに、いつか公園から車阪へ外れた通りで眺めた藥種屋の、硝子の檻に飼はれた蛇を思ひ出した。

其れは一目みてすぐに厭惡の的になるやうな、蒼白くねぢ曲つた頰骨、品のな

い鼻、それに毛蟲のやうにぞろぞろ這つてゐる二疋の濃い眉、眉のそばまで垂れてゐる長い髪など、みるからに自分ながら慄然とするほど衰弱された容貌であつた。その中には、一つとして人間の美しさも優しさをも見ることができないほど、それ自身が、昆蟲に近い雜作と無智とをもつてゐたが、昆蟲にみられるやうなあどけない間抜けた美しさがなかつた。人間としての最も惡い素質、その素質の狡るさによつて曲折された不愉快な線の連なりであるとしか見えなかつた。

豐はときどき獸のやうに、自分の顏を鏡のなかに凝視しながら、烈しい憎念に搔き搖られながら叫び立てたり、または飛んでもない氣狂ひの眞似をして見たりしてゐた。さう爲ることが自分らしく、また自分の容貌はさうすることに最もらしい動物的な可能性をもつてゐたのであつた。

「おれはかういふ風に、頰のあたりに五本の指を引ッかけて見るといい氣もちになる。おれらしい氣がする……。」

さう言ひながら、彼は口を開いて、蟹のやうながりがりと折れまがつた毛深い指を、その凹んだ頰にあてながら、まるであたりに人と話してゐるやうに嗤ひぬくのであつた。

「ひひひひ……と嗤ふのだ。白い齒を剝いて——猿のやうに苛立たしくなつて、熱い息を吹くのだ。」

と豐は叫ぶと、こんどは心の奥からしんみりとした言葉が彼をさへぎつてくるのである。

「もつと靜かに、いまお前はひよつとすると、ああほんとにひよつとすると氣がふれるかも知れないぞ。」といふやうな氣もしてくるのである。

「耐らない。これは耐らない。」

さう叫ぶと鏡を投げ出して、彼はまたふらふらと外へ出た。外の光線は夕方であつたにも拘らず縱橫から彼にせまつた。まだ十分でない彼は町などや辻辻でひ

と息入れながら、習慣的に上野公園を歩いて居た。それから陸橋の上を渡る時、それがさうしないと安心出來ないやうに伸びあがつて、淺草の方をながめ、そして又階段を下りて車阪から、例の廣い通りへ出て行つた。何でも彼でも此處を歩かなければならない命令者がゐるやうに、とぼとぼと、干蛙のやうな彼はぶらつきながら歩いて行くのであつた。

例へば公園を一日に一度づつ歩かなければ睡れないといふ夢遊病者が、此頃になつて變に少年間に流行り出したやうに、彼もやはり夫の病氣に憑かれたものの一人になつたのかも知れない。ただ、さうして歩いてゐるうち、退屈な時間が後へ後へと消えて行くのだ。人通りは絶え間なく立ち代り入れ代つて、そこは何時も雜魚筌のやうに蒸れあがつてゐたのであつた。

彼は自分の頭がふらふらする毎に、どこかで自分が繩のやうなものにぶら下げられてゐるやうな氣がしてゐた。動ともすると、隣の人に押されて、次の人からつきもどされ、刹へ騷然とした樂隊は一つづつの館の入口からラッパのやうに漏れて聞えるのであつた。彼は揉まれながら自分で歩くといふ意識よりも、人と人との群に甘く狹まれてのろのろと歩いとゐるといふ方が適當なくらゐであつた。

「ここで此儘ぶつ倒れるとしても……どれだけも私は人人に手數をかけまい。かけたつて打倒れたあとならばどう言はれたつて關ふものか。」とさへ考へながら、やはりふらふらに吊られるやうになつて歩いてゐるのであつた。もはや夕暮はしだいに濃く空をそめてゐた。

そのとき豊はふとおしげさんのやつてゐる西洋料理店を思ひ出して、其處まで幾度となく立停つては休み、さうして、やつと其處のドアのなかへ轉げ込むやうに入ると、晩食ごろの卓子はどれもこれも一杯であつた。とある窓際の椅子に坐

ると、もう一歩もあるけないやうな深い疲れを感じて、肩息をしながら帳場の方をながめた。

暫くすると、奥から出てきたおしげは豐を見つけると

「まあお久しいこと。」と言つて、卓子の方へ近づいてきて、ひと目彼をみると、びつくりしたやうな顔をした。そして

「御病氣だつたのですか。すつかり見違へるほどですよ。隨分お窶れになりましたわ。」

さう彼女は、どの客にでも言ふやうに、もう一度彼の顔をながめた。その視線が顔のあたりから素早く着物をしらべ、足のさきまで辷り落ちた。うす汚い豐は自分の服裝と蒼白くやつれ込んだ顔を、おしげのうしろの立鏡のうちに眺めて思はず目をそらせた。

「少し身體を不良くしてね。すつかり日干のやうになつて終つたんです。」

彼はこれだけ言つて、おしげがまだ東京館の廊下をあちこち歩いて居た頃とは、どれだけも異つてないのを見た。

「あの方はどうなすつて——。」

すこしあたりを憚るやうにいふと直ぐ、豐の無表情の中からもうあの女のことを尋ねても駄目だといふことを感じたらしい怜しい目を微笑させた。

「あれからすこしも會はないんです。考へて見たくもないんです。」

沈みながら痙攣つたやうな冷笑を浮べてかう答へた豐を見ると、おしげも沈んだ聲を落して、如何にも同情したやうな寧ろわざとらしく眉をしかめて

「あの方に限つてそんな間違ひはないと思ふんですけれど、女ですからね。」と細君らしい碎けた言ひ方をした。

「もう言ひつこなしにしませう。詰らないから。」

豐は冷たくさう言つて、酒と何か一皿ばかりの注文をした。おしげは「氣を落

しなさらない方がようございますわ。」と言つて、コック場の方へ行つた。

いつも蝙蝠のやうに東京館の壁ぎはに食附いてゐたおしげの亭主は、入れ違ひに入つて來て彼を見つけた。

「ちつとこちらへもお話しに寄つて下さい。いつも閑暇で困つてゐるんですから。」

と微笑ひながら言つて、彼のからだを一渡り眺めると、その無感覺な表情の中にどこか蔑んだ卑しいものを眺めるやうな氣もちがあらはれたのを豐は逸早く感じた。こんなに汚ない姿をして居れば、誰でもさう感じるだらうと思つたが、それとは反對に沈み切つた不快さが何等の間にか彼の心をおもおもしくしてゐた。

豐はいい加減に返事をすると窓の外に目をそらせた。すぐ隣は塀板になつて、板はじくじくと蝕ばんで、ぼきぼきして腐りかかつてゐた。

そこへ酒を持つて來たおしげは、

「おもちなさいましな。」と言つて酌をしてくれたが、彼は亭主に氣をかねるといふよりも、さつきの表情が目にちらついて、早くおしげがあちらへ行つて呉れればいいといふ卑屈な遜つた心になつてゐた。

「少しづゝ酌いで下さい。どつと飲ると一時に酔つてしまふから。」

彼がさう言つたとき、すぐ頭の上から來るやうな聲で、

「おしげや、ちよいと。」

と亭主の呼ぶこゑがした。おしげは返事をして置いて、豐にむかつて

「ごゆつくりなさいましな。」と、それでも女らしく言つて帳場の方へ行つた。

彼はうつむいたまま帳場の方を見ないでゐたが、明らかに亭主が自分のなりの汚ないことなどから、妻を彼の方にやつて置くことの不愉快を感じたことを直覺した。結局、獨の方がいいと思ひながら、永い間口にしなかつた温かい飲料を少しづつ飲んだ。弱り切つたからだの節節に酔はとぐろを卷いて、どくどくと流れ始めた。それと同時にうつとりしたいい氣持になつて彼は始めて室内を見廻し

た。その時端なく奥の方の隅に二人の男が頻に自分を眺めてゐるのを見出すと、どこかで會つた男だと、ちよつと間考へ込んだが思ひ出せなかつた。けれども向ふの方で覺えてゐるらしく、一人の男が

「やあ。」と、不躾に聲をかけた。

その聲はまだ自分の記憶に殘つてゐるらしく、はじめて聞いた聲でなかつたので、彼はきよとんとした目つきで、二人の男を凝視した。そのとき嗚嗟の間にいつかお春と自分とを追ひ廻した男であることが思ひ出された。彼も思はず

「やあ。」

と少し低い聲で答へると、二人は何か囁きあつて豐の卓の方にやつてきた。そして例の役者のやうな優顔の男は

「君はたいへん憔悴してゐるぢやないか。あれから暫くになるが結局どうなつたのだ。あの女は——。」

と彼は椅子にかけると、せいの低い方の男もその横に腰をおろした。こんな所で然もこの男等に會ふのも、何んだか初めから定つて居ることのやうに思はれた。彼は妙に惡ずれた微笑を殆ど用意するまでもなく、ひとりでに浮んで來るままに浮ばせた。

「あの女のことなら僕より君等の方が詳しく知つてゐる筈だ。」

豐はかういふと、對手の鋭い目さきを押へて、ふふと微笑つた。

「まあ、さう言はないで一盃やらうぢやないか。あれから久しぶりだ。君も身體をよくしなければならないからね。」

とわけの判らないことを言ふと、彼は大きな聲で酒を言附けた。おしげは豐がこの男等とテーブルを圍んだ瞬間から變な顔をして亭主に何か耳打をして囁いて

—蝙　蝙—

ゐた。それほど何日もの服裝とちがつて、彼等も泥と泥との間を潜りぬけてきたやうな、垢にまみれた汚い單衣と繩のやうな帶を締めてゐたのである。

「兎も角彼の女は君の感附かない前に例の株主の子息が手をつけてしまつたんだよ。それはその當時僕等がちよつと話を先方につけて埒をあけて貰つたんだがね。」と言つて脊の低い方をふりかへつて、口のさきで嗤つたが、「今度は君も一口這入つたらどうかと思ふんだ。君が入つて呉れるなら鬼に金棒なんだがね。」

さう男はいふと、肘をまげて豐の顏を覗き込んで「誰だつてやることなんだよ。構ふものかね。意趣晴らしぢやないか。」と附け加へて、喉の奥でげらげら笑つた。

「どうして君等はそんなことを詳しく知つてゐるんだ。」

豐は酒をついでやりながら言ふと、男はそれをぐいと一口にやると

「公園のことなら大概知つてゐるんだ。ことにあの女は最初からやりそこなつた

ので、永い目で見てゐたのさ。だから俺達の方からいふと仕返しの氣もあるんだ。」

かれはかう言ひ言ひ「君にその氣があるかどうかを尋ねたんだ。」と、また鼻のさきで笑つて言つた。

豐は其男の表情がしんと靜まり切つてゐて、かういふ問題を扱かつてゐても、すこしもどぎまぎしないで、對手の心をさしつらぬくやうに見透してゐるのを感心してみてゐた。

「實はあの女にはもう一切關係もないんだし、先方へ話をする氣もないんだ。今更兎や角言つたつてどうにもならないだらうぢないか。」

彼は落着き拂つてさう答へると、男は少し身體を起しかけて

「馬鹿に諦めがいいな。そんな風だと話にならないが……。」

と男は呆氣に取られて言つた。彼は少し低いこゑで殆ど囁くやうに

—蝙　蝙—

「だから君等がやれるだけ先方の男だけをやつつけたまへ。けれども女はよせ。あの女は欺されたも同様だから。」

と言つて、おしげがこちらを眺めてゐるので、少し厭な氣がした。自分がこの男らの仲間ででもあつたやうに思はれることが、これまでの關係上殊に妙にさういふことをおしげにも考へさせたくなかつたのである。

「それもそうだね。女はそのうち衝き放されるに決つてゐるんだから、その前に何とか渡りをつけたいんだ。」

其男はさういふと何か別なことを考へるやうな目をしたが

「ぢや君はこの話についてもう何も僕等に交渉がないわけなんだね。」

とはつきりとけじめをつけるやうに言つて眉をしかめた。

「いいとも勝手にやつてくれていいんだ。」

と豐は微笑ひながらいふと

「いや君もその服裝だと隨分凄くなつて見えるからね。」と言つて嘲笑的に豐の古下駄のさきまで見下した。豐は無感覺的に

「さう見えるかな。」と作り笑ひをしながら自分の姿をまた鏡の中に見比べた。

その身窶らしさと汚さとは、この男らとどれだけも違つてゐなかつた。豐がかうして話して居れば同じ仲間と見られるのは當り前でその顏立ちから言つても、豐は妙に口を塞がれたやうな氣がして默つて考へ込んでゐた。「君もその服裝では隨分凄くなつたやうだね。」と言つた彼等は、ずつとさきから豐を同様な不良少年と思つてゐたらしく、あれから様様な試練を經たものとして彼を更に見直してゐるからしかつたのである。

彼は急にこの男らと離れたいと思つて

「外に別に用事がないんだね。」と言つて、椅子を立ちかけた。

「もう暫らく居ませんか。」といふのを無理に勘定を濟ますと、男等は

「その内又何處かで會はう。」と言つて、ひよろひよろとドアの外へ出ようとする彼に「危ないよ君。」と注意した。さつきから此方をながめてゐたおしげは勘定の時にも他の女をよこして自分で出てこなかつた。豐はすぐあの男と話してゐたことが、おしげにも不良少年のやうに思はれたことに氣がついた。

外へ出ると、足は獨りで館街に向つて歩みつづけた。すつかり夜になつた建物は紙製の龍宮のやうな明るさとけばけばしさの中に浮いて見えた。豐はその時獨りで、ふらふらと醉のまはつた不透明な、半ば夢を見てゐるやうな氣持ちで切符を買つて、どれだけ登つたかも知れない例のラセン階段を殆ど這ふやうにしてのぼつた。

席についてからも例のドアの方をながめたけれど、お春らしい姿もなく、徒ら

に蒸しあがれるやうな人嗅い匂ひが鼻をついて來た。

音樂は絶え間なく起つてゐて、消え浮ぶ連續寫眞の拍手があちこちから雷のやうに起つて、唯でさへ、ふらふらしてゐる頭がこんどはややともすると眩暈しさうになつて來て仕樣がなかつた。

「おれは此處へどれだけ入つて坐つたことだらう。ほとんど毎夜のやうにこの藍色の空氣に浸つてゐたが、しかしそれらも今はまるで夢のやうな氣がする——。」さう思ひながら彼は嘔氣を催すやうな眩暈の爲めに、もう暫らくも立つてゐることが出來なくなつて來たのである。あたりの人の頭がみんな朦朧とした霧の中に浮んでゐるもののやうに煙つぽくなつて見えた。

豐は立つてふらふらと廊下へ出ると、そこの窓際にしがみついて、泥を吐く雜魚のやうに窓のそとの冷氣と空氣とを呼吸した。そのとき彼の目の前を一人の館の女が通りすぎるのをちらりと見た。と、彼は夢のやうな遠い氣持ちになつて

「お春といふ人がこの館に居りますか。」とぶつきら棒に尋ねた。と女はすこし疳聲まじりで

「あの方はもうお止めになりました。五日ほど前に……。」

さう言つて急がしさうに行つて終つた。

「五日ほど前に止めたといふと、例の歸りを押へてから二日ほど後だ。とするとあのとき既う止めることになつてゐたのかも知れない。」彼は心でさう考へると、ぐつしやりしたやうな氣になつて階段を又降りはじめた。何も彼も濟んでしまつたやうな氣になつて、外へ出ると、急に脚氣の方がひどくなつてきて、しきりに痛み出した。仕方がないので館の裏手の厚い壁にもたれて、膝頭を叩きながらゐると、醉や疲れが一時に出たのか最う立ちあがる力もなくなつてそこにへばり込んでしまつた。

そのとき誰かが、恐らく館の小使か誰かが豐の前に立つて

「こんなところに坐つてゐてはいけない。君は病氣なんですか。」

と言つて肩に觸れたものがあつた。彼は默つて起つて、また、ふらふら腰の拔けた人のやうに歩き出した。意識は朦朧として遠く夢のやうになつてゐた。明治四十四年六月六日の晩のどんよりした空から重い大粒な雨が落ち始めた。あちこちの屋根や道の上にぽつりぽつりと音がし出した。

大正拾年八月廿五日印刷
大正拾年九月壹日發行

【定價金貳圓八拾錢】

著者　室生犀星
東京市京橋區南鍋町一丁目二番地
隆文館株式會社代表者

發行者　松野鶴平
東京市京橋區南鍋町一丁目二番地

發兌元　隆文館株式會社
電話銀座（一七八〇番 二二四一〇番）

印刷所　隆文館印刷所
東京市麹町區飯田町二丁目三十三番地

印刷者　三澤善哉

撮影　東京八五三番

不許複製

編輯

新しき創作集

古き毒草園

室生犀星著

古い城下の一市都を背景にしたさまざまな男女の生活を描くに惱ましきまでに官覺に沈湎したる「古き毒草園」を初めとし外拾數篇の物語りは總て著者が纖細にして濃厚なる筆觸を凝らしたる新しき創作集なり。

恩地孝四郎氏裝幀　四六判・四百廿餘頁　絹裝・最美本　定價金貳圓四拾錢　送料金拾貳錢

忽再版

新刊

新しき創作集

香爐を盜む

室生犀星著

こはあやしき毒草の如く惱ましき色とりどりなる物語りより成れるものにして何人も異常なる香氣ある世界に、官能と感覺とに、爛熟と燃燒との世界に踏み入るの思ひあらん。「香爐を盜む」外八篇ごとく著者最近の新作をおさむ。

恩地孝四郎氏裝幀　四六判・四百餘頁　絹裝・最美本函入　定價金貳圓四拾錢　送料金拾貳錢

谷崎精二氏著 ● 永瀬義郎氏装幀

水のほとり

創作集

忽再刊

作者はさまざまな人の生活を觀て取り、何等の雜り氣もなく如實に、その日常生活を描寫し、最後に特殊の心的過程を摘出して生な人間を明々と覘かせる。本書は「水のほとり」他拾數篇悉く作者の正直な經驗から最も尅明に人間を織込んだ獨自の傑作である。

一九二一年・二月刊行

四六判・四百餘頁
絹裝・函入美本

定價金貳圓四拾錢
送料金拾貳錢

相馬泰三氏著

鹿子木夫人

四六判・四〇〇頁
絹裝・函入美本
一九二一年・五月刊行

定價
金貳圓四拾錢
送料拾貳錢

内容

1 鹿子木夫人
2 自信
3 釣葱と仔描
4 たはむれ
5 二夫婦
6 喜代子
7 處女
8 さよ子
9 BI軒事件
10 芳賀とその友
11 胸の痛み
12 野の哄笑
13 Y驛附近
14 幼年の思ひ出

新しい現代の女性を題材として慈愛、結婚、貞操の新問題を稀なる輕妙と平明と而して暗示的な筆致で描き華かな都會生活に内在する悲痛を記錄したのが本書の前半である。其後半には淋しい可憐な情感深いる田園の物語を添へた最も自信ある創作集である

岡本綺堂氏著

新刊

四六判・四百廿頁　定價金貳圓四拾錢
絹裝・函入美本　送料金拾貳錢

▲子供役者の死

● 田中良氏裝幀 ●

著者の小説は毎に豐麗なる情緒の流れに臨み、深く義理人情の眞底に徹せんとする獨自の境地を描かれてゐる。特に本書は其の傷々しき哀愁に充されたる『子供役者の死』を初めとし、拾有餘篇の物語は何れも最新の創作にして爾も其の戯曲的視野に彩られたる勞作は異常の魅惑に富めるものである。

新刊　好評

スンマーロ偵探

半七聞書帳

岡本綺堂氏著

田中良氏裝幀

四六判・三〇〇餘頁函入
絹裝豆絞美本
定價金貳圓貳拾錢・送料拾二錢

江戸の名探偵半七老「捕物帳」の姉妹篇として、綺堂氏一流の人情味に徹し鎖雜せる世間の實相を穿つた偵吏苦心の實話で、半七老が吉五郎親分のミモより傳聞した世にも奇怪な「半七聞書帳」である。「三河萬歳」「人形の怪」「張子の虎」「旅繪師」「槍突き」「小女郎狐」「松茸」「あま酒賣」の八編、筋は恐怖、執念、闇黑、危機、姦詐、驚異の混濁した善玉惡玉の活事件を興味醇熟の筆致を以て取扱ひ實に驚嘆の外なき尤も成功したる探偵ローマンスの快著である。

文壇の黎明期に新人の處女作を提供す

新しきアダムとイヴ

田代倫著

一九二一年五月刊行　四六判・四百九拾頁・上製美本

愛の戀の二部より成れる最長篇の白小説！

深刻なる創造慾を享有する男女が熱烈なる戀愛の共鳴感に導かれて共に藝術の完成に專心するといふ自已表現の慘めさと彼等が周圍の因襲的生活に反逆者たるの外なき懊惱とに基いた自叙體の小説で其描寫の大膽無遠慮極る點に於て既に月並作家の流を拔いてゐる人生の苦味酸味の中に滴る如き甘味と芳醇の氣分を湛へた此新進作家苦心十年の名作として普く江湖に推奬する

文學博士坪内逍遙先生序　早大教授片上伸先生譯

テニソンの詩

新形最美裝
定價金壹圓貳拾錢
送料金拾貳錢

挂冠詩人テニソンの詩は、典雅流麗なる語句に平靜和樂の情調を漂はし、英文學中前後其比儔を絶つと稱せらる。寛に詩技の圓熟と詞章の豐麗と行くとして可ならざるなき玲瓏の詩才は等しく萬人の羨仰する所也。亦片上氏の譯筆は高雅清新にして原詩の情趣を傳ふるに天下獨歩の觀あり。

◆人はパンのみに生く可からず詩を繙くものは幸也◆

夏目漱石先生序文學士浦瀨白雨生先譯

ウオズウオスの詩

新形最美裝
定價金壹圓貳拾錢
送料金拾貳錢

一莖の野花に大自然の力を觀じ、無心の雲に人生の情緒を偲ぶべからずや、本書收むる所の譯詩拾數篇量に於て大ならずと雖も、能く湖畔詩人の面影を寫して遺憾なし、幸に情感ある青春士女の机邊の伴侶として本書を求められんことを。

千家元麿氏著◘淺井政藏氏裝幀

元麿詩選 太陽の愛

最新型極美裝
總紙數約四百頁
定價金拾貳圓
送料金拾貳錢

ヴアーヂルの壯大ブラウニングの敬虔！之を兼備へた元麿の詩は無窮の天を人間の心に育て上げヒューマニティーの涙ぐましい聖愛を喚び起させる。その力その愛は太陽の翼の如く汝の靈魂に映え輝いて人間の勝利を覺らせる。本會は元麿氏を世界的の新詩人として特に本詩集を天下に推薦する。（聖書文學會）

三浦關造氏著◘淺井政藏氏裝幀

詩集 祈れる魂

最新型極美裝
總紙數約三百頁
定價金壹圓五拾錢
送料金拾錢

江部鴨村氏序して曰、「多くを學び多くを知りしかも原始人の如く無智であり幼兒の如く單純であり野蠻人の如く自由なる三浦關造氏は神秘の殿堂生命の本源に自分の本地を見出す」と同センチメンタリズムの玉殿ユーフェミズムの高樓に放たれた野獅子の如き此の詩は清新なる夜明けの強烈な戰慄であり悲しき人間の祈願また放免であり救ひと不死の證明である……識者間に噂高き英和兩詩を收む。（聖書文學會）

山村暮鳥氏著◘淺井政藏氏裝幀

暮鳥詩選 穀粒

最新型極美裝
總紙數約三百頁
定價金壹圓五拾錢
送料金拾錢

人間の悲しみ生の惱みを化して神となす奇蹟の詩人暮鳥氏は元麿氏と共に推讃すべき世界的詩人である沈痛にして深邃、嚴としてヒューマニティーをかき抱き、嚴として高らかに歌ふ其の聲は人間の心の透徹した敬虔さを鳩の如く舞ひ上らせ穢土を化して淨土となすの魅力がある。（聖書文學會）

501
185

終